心連心
Heart to Heart

第13期

浅草寺にて

心連心：中国高校生長期招へい事業

報告書

平成30(2018)年9月4日―令和元(2019)年7月19日

目次

はじめに…… 3

事業紹介…… 4

生徒名簿…… 5

思い出のアルバム…… 6

第13期生に聞きました！ …… 16

心連心ウェブ日記…… 20

第13期生好きなものランキング …… 21

帰国を前に ー作文集ー …… 23

第13期生を受け入れて …… 50

あとがき…… 56

心連心：中国高校生長期招へい事業

第13期 報告書

はじめに

「心連心：中国高校生長期招へい事業」第13期生が無事、本年7月に帰国しました。
全国18都道府県での留学期間中は、受入校、ホストファミリー、地域の皆さまに温かく見守っていただく中、一人ひとりが様々に貴重な経験を重ねることが出来ました。ここに心から御礼申し上げます。

約1年間の日本での留学生活の時間の経過はとても早く、そしてその間の中国人高校生の心身の成長は驚くほど早いと実感しています。来日直後のなんとなく頼りない、あどけなかった顔つきが、日本各地で充実した高校生活を体験し、周りの方々に温かく支えられながらも、いろいろな困難に直面し、それらに正面から取り組み、乗り越えてきた自信から、今や日中の次世代を担うべき人材として頼もしい若者に育ってくれています。彼らの成長ぶりを傍らで実感できるのは、本長期招へい事業立ち上げ当初の制度設計時から深く関わった人間として、望外の喜びと事業発足以来13年間という時間の経過をかみしめています。

今年もまた涙あり、笑いありの熱いドラマが日本全国津々浦々で展開されました。この報告書にも感動的なエピソードが、彼らなりの感受性にとんだ豊かな言葉でちりばめられています。彼らそれぞれが自分の言葉で綴った作文を是非ご一読いただければ幸いです。

「心連心：中国高校生長期招へい事業」の卒業生は、第13期生を含めると累計416名にのぼります。令和元年11月現在、約半数となる196名が再び日本に戻ってきて、日本の大学・大学院へ進学したり、日本で就職し社会人となって活躍しています。いま現在の居住地が日本でも中国でも、或いはその他の国であっても、多くのOB・OGが、高校時代の日本留学経験を糧に自分の夢や目標に向かって進むかたわら、当センターが実施する様々な日中交流事業に参加してくれたり、自ら日中交流プログラムを企画・運営する等しています。「日中交流の輪を広げたい」と積極的に活動する彼等の頼もしい姿を見ることは、我々にとって大きな喜びです。

日中両国の青少年が互いの絆を深めながら共に成長していけるよう、当センターではこれからも倍旧の努力を重ねて参ります。第13期生の受入にご協力くださった皆様にも、引き続きご支援・ご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。

独立行政法人国際交流基金　日中交流センター
所長　堀 俊雄

「心連心：中国高校生長期招へい事業」とは

「心連心：中国高校生長期招へい事業」は、未来志向の日中関係を築く礎として、より深い青少年交流を実現させるため、日中両政府間の合意に基づく事業としては初めての中国人高校生の長期招へい事業として、2006年度に開始されました。本事業では“心と心をつなぐ”をモットーに、「心連心」というプログラム名称を用いています。

中国政府の推薦と国際交流基金の選考を経て、本事業の第13期生として2018年9月4日より来日した中国人高校生26名は、日本各地に滞在し、様々な活動を通じてホストファミリーや日本の高校生たちとの絆を深めました。

本事業は、中国の高校生に日本滞在の機会を提供し、その生活を通して日本の社会と文化を知ってもらい、同時に日本の高校生たちにも同年代の中国の高校生と交流する機会を提供するものです。直に交流し、心と心を結び合うことで、日中両国の長期的な関係発展の基礎となる若い世代の信頼関係を築くことを目指しています。

実施概要

期間	2018年9月4日～2019年7月19日
実施体制	中国国内での招へい生選考……国際交流基金と中国教育部が共同で実施 日本国内における受入れ……受入校と国際交流基金が共同で実施
招へい生徒	全26名（女子15名、男子11名） 第13期は、天津市、山西省、遼寧省、吉林省、上海市、江蘇省、福建省、山東省、河南省、湖北省、湖南省、陝西省、広東省、浙江省、貴州省より選抜
国内受入地	北海道、岩手県、秋田県、東京都、神奈川県、埼玉県、長野県、愛知県、三重県、大阪府、京都府、和歌山県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県
経費負担	学費や教科書代・副教材費、制服代など生徒が学校に支払うべき経費を上限100万円（寮の場合は150万円）の範囲内で国際交流基金が支弁
協賛	カシオ計算機株式会社、株式会社資生堂

「心連心：中国高校生長期招へい事業」第13期生名簿

2018年9月4日-2019年7月19日

No.	氏名	性別	出身校	受入校	都道府県
1	陳 鈺加	女	福州外国語学校	酪農学園大学付属とわの森三愛高等学校	北海道
2	劉 澤華	男	済南外国語学校	立命館慶祥中学校・高等学校	北海道
3	夏 晗	男	上海市甘泉外国語中学	盛岡中央高等学校	岩手県
4	王 語馨	女	西安外国語大学附属西安外国語学校	明桜高等学校	秋田県
5	邱 一鳴	女	東北育才学校	埼玉県立蕨高等学校	埼玉県
6	代 恩鳴	男	西安外国語大学附属西安外国語学校	東京学芸大学附属国際中等教育学校	東京都
7	陶 詩涵	女	蘇州外国語学校	明治学院東村山高等学校	東京都
8	鄧 博文	男	長沙外国語学校	横須賀市立横須賀総合高等学校	神奈川県
9	馮 艷群	女	六盤水市第三中学	長野県長野西高等学校	長野県
10	姚 瑶	女	済南外国語学校	桜丘高等学校	愛知県
11	趙 子玥	女	天津外国語大学附属外国語学校	光ヶ丘女子高等学校	愛知県
12	梁 煜程	男	南京外国語学校	三重高等学校	三重県
13	周 子薦	男	河南省実験中学	立命館宇治中学校・高等学校	京都府
14	黄 飛逸	女	洛陽外国語学校	大阪府立桜塚高等学校	大阪府
15	李 心怡	女	南京外国語学校	大阪府立三島高等学校	大阪府
16	孫 逸馳	男	東北育才外国語学校	清風南海中学校・高等学校	大阪府
17	趙 芸萱	女	広州外国語学校	和歌山県立那賀高等学校	和歌山県
18	陳 子萱	女	黄岡市外国語学校	活水高等学校	長崎県
19	張 晨陽	男	長春日章学園高中	長崎県立壱岐高等学校	長崎県
20	胡 澤兵	男	岑鞏中学	岩田中学校・高等学校	大分県
21	林 煜菲	女	福州外国語学校	熊本県立宇土中学校・高等学校	熊本県
22	梁 軒振	男	東北育才外国語学校	熊本県立第一高等学校	熊本県
23	金 星国	男	吉林省和龍市高級中学	日章学園高等学校	宮崎県
24	鄭 天祺	女	天津外国語大学附属外国語学校	鹿児島県立武岡台高等学校	鹿児島県
25	王 鈺瑄	女	太原市外国語学校	神村学園高等部	鹿児島県
26	薛 越	女	杭州外国語学校	沖縄県立向陽高等学校	沖縄県

思い出のアルバム

来日研修 in 東京

2018年
9月4日－9月8日

2018年9月4日、第13期生26名が羽田空港に降り立ちました。これから約11ヶ月の留学生活に先立ち、それぞれが生活する地へ出発する前に、4泊5日の「来日研修」を実施しました。

日本で生活していく上でのルールや食事マナーなどの生活指導、地震等自然災害に備えた防災訓練を受けました。

「来日歓迎レセプション」では、一人ひとりが日本語で自己紹介と留学生活の抱負を発表しました。

レセプションの翌日、受入校の先生方に付き添われ、それぞれの生活地に向けて旅立って行きました。

第13期生の成長の軌跡をどうぞご覧ください！

心連心ウェブサイトからも来日研修の様子をご覧下さい。
https://chinacenter.jp/japanese/invitation/now/record/051.html

外務省表敬訪問

中国大使館
表敬訪問

受入校の先生との対面式

日本の交通ルールなどを学びました。

防災館で地震体験

来日歓迎
レセプション

1年間お世話になります！

思い出のアルバム

日々是好日 Part1

日本全国それぞれの留学先で、11か月を過ごした13期生たち。聞きなれない方言、想像よりもずっと厳しかった部活動、中国とは違った文化祭や体育祭などの学校行事、電車や自転車での登下校…初めての経験の連続でした。日本の文化・習慣になれずに戸惑ったり、怒られたり、失敗したり、挫けそうになったり、さまざまな辛いこと、悔しいことも経験しました。それでも最後まで過ごしてこれたのは、周りの友達や学校の先生、寮の仲間たち、ホストファミリーの支えがあったからこそ。日本でのかけがえのない思い出は、いつも皆が一緒でした。

第13期生たちの日常をつづった留学日記もどうぞご覧下さい。
https://chinacenter.jp/diary/index/term:13

オリパラのホストタウンで交流事業に参加

中国語の先生として特別授業

大切な仲間ができました

様々な部活に挑戦！

和服を着て記念写真

思い出のアルバム

日々是好日 Part2

ラジオ番組に出演

ホストファミリーと
餃子づくり

日本の鉄道
サイコー！

沖縄の伝統的衣装を体験

ホストファミリーとの思い出

日本語や英語の
スピーチコンテストで大活躍

令和おめでとう！！

日本といえば桜！

思い出のアルバム

3か月目研修 in 埼玉・神奈川

2018年
11月9日−11月13日

来日から3か月目になる2018年11月、埼玉県にある国際交流基金日本語国際センターにて、「3か月目研修」を行いました。来日後2〜3か月目は、留学生にとって悩みや問題に直面しやすい時期を迎えます。生徒それぞれの悩みを同期生同士で共有し合い、その問題の背景にある原因及び解決方法・対策案を探りました。また、各生活地の名産品や観光地、学校、部活動などについて、写真を交えながら一人ずつ発表し、紹介し合いました。

研修4日目には、フィールドワークで神奈川県鎌倉を訪問しました。大仏で有名な高徳院や長谷寺や建長寺、江の島の見学を行いました。また、夜は新横浜のラーメン博物館で日本のラーメン文化を体験しました。

それぞれの生活地で留学生活をスタートさせた同期生が集い、日本語の上達や精神面で成長し始めた姿にお互いに大いに刺激をうけたようです。

心連心ウェブサイトからも3ヶ月目の様子をご覧下さい。
https://chinacenter.jp/japanese/invitation/now/record/052.html

日本人との
コミュニケーションの
とり方を学びました。

悩みや課題を
共有し合いました。

和太鼓体験

思い出のアルバム

地域別研修 in 仙台・東京・京都・福岡

2019年3月

来日から半年になる2019年3月、仙台・東京・京都・福岡において小規模型の「地域別研修」を1泊2日の日程で行いました。9月の来日研修、そして11月の3か月目研修で立てた目標の再確認を行い、新学期に向けての決意を新たにすることが目的です。生徒それぞれの学校生活や部活動の様子、達成できた目標やその方法を共有し合ったり、それぞれが気づいた日本と中国の文化の違いとその背景について発表し理解を深めました。

13期生たちは、充実した研修を終え、残り半年の留学生活に向けて改めて気合を入れなおし、それぞれの留学先に戻っていきました。

仙台

久しぶりの再会

留学生活前半をふりかえります

東京

福岡

京都

留学生活後半の目標を発表

思い出のアルバム

帰国前研修 in 埼玉・東京

2019年
7月16日−7月19日

2018年9月に来日し、約11ヶ月の留学生活を終えた第13期生は、2019年7月19日、無事に帰国の日を迎えました。楽しいことだけでなく、辛いこと、苦しいこともたくさん経験してきた彼らは、来日の時と比べて見違えるほど成長し、堂々とした姿を披露してくれました。帰国前日の「帰国前報告会」では、部活動や学校行事、ホストファミリーとの思い出など、日本での留学生活で自らの感性で感じ、学んだことを流暢な日本語で発表してくれました。報告会の最後には、全員に修了証書が手渡され、みな達成感に満ちた晴れやかな表情を見せてくれました。

第13期生の留学生活はこれで終わりになりますが、彼らにとってはここからが始まりです。この11ヶ月で得た経験を糧に、将来の夢に向かって一所懸命に努力し、日中友好の架け橋として大きく羽ばたいてくれることを心から願っています。

心連心ウェブサイトからも帰国前研修の様子をご覧下さい。
https://chinacenter.jp/japanese/invitation/now/record/054.html

終了証書授与

留学の成果を
発表しました！

国会議事堂見学

東京大学
キャンパス見学

浅草で着付体験

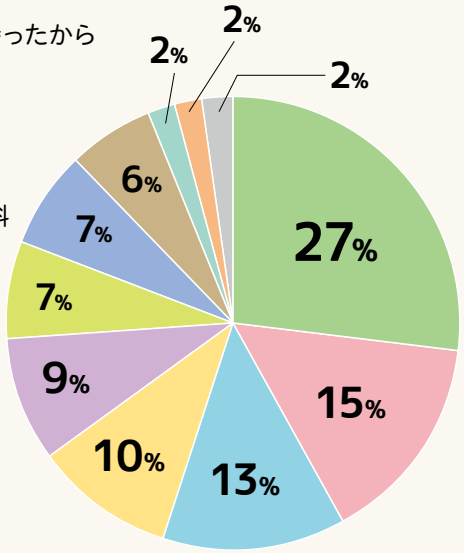
感謝の気持ちをこめて
歌を歌いました

第13期生に聞きました！

日本で約１年間を過ごした13期生たちに
色々な質問をしてみました！

Q 日本語を勉強し始めたきっかけは何ですか。

- アニメ・漫画
- 伝統文化
- 日本に旅行して興味を持ったから
- 小説・書籍
- スポーツ
- 友達が勉強していたから
- 成績の関係で日本語学科になったから
- ドラマ
- J-POP
- その他
- 親・先生からの薦め

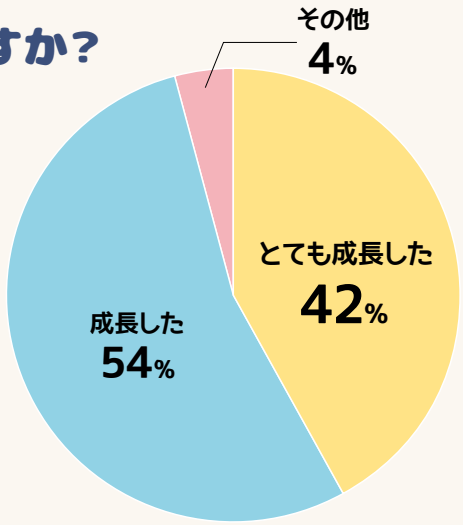


Comment

第12期生と変わらず、第13期生も日本語学習のきっかけとしては「アニメ・漫画」が1位という結果になりました。「伝統文化」や「小説・書籍」も上位にきており、日本文化への関心から学び始める人が多いことがうかがえます。また、「日本に旅行して興味を持った」からと答える人が増えているのもここ数年の傾向です。

Q 自分はどのくらい成長したと思いますか？

- 将来の目標が明確になった
- 自分の力を信じ、何でも果敢に挑戦するようになった
- 思いやりの心を持つようになった
- 自立心が更に強くなった
- コミュニケーション能力が上がった
- 他人の価値観を受け入れられるようになった
- 勉強以外のことにも関心を持つようになった
- 考える力、問題解決の力がついた
- 性格が明るくなった
- 受験のためではなく、日本語の魅力を発見するために日本語を勉強するようになった



Q ホームステイ・寮生活は良かったと思いますか？

●ホームステイ

・本物の家族のようになれた

・毎日おいしい料理が食べられた

・とても親切に接してくれたり、いろいろ助けてくれた

・日本の文化に更に興味を持つようになった

・生活習慣の違いについてたくさん学んだ

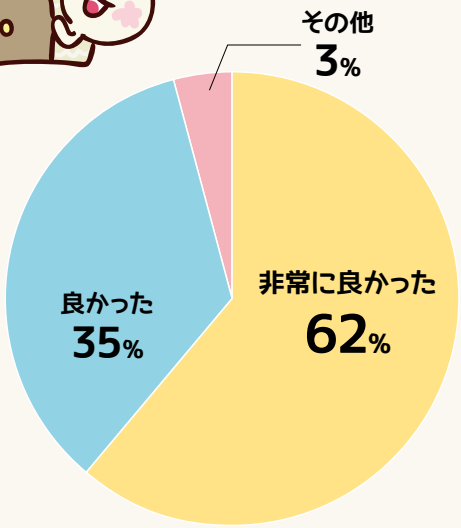
・ホストファミリーから暖かい心と思いやりを深く感じた

●寮生活

・寮長さん、寮母さんに親切にしてもらい大変お世話になった

・寮の友達と毎日話したり遊んだりして、
日本語能力や交流能力が上がった

・いい仲間ができたこともあれば人間関係に悩んだ時期もあったが、
最後は寮が自分にとって心地よい場所になった



Q 楽しかったこと・感動したことはなんですか？

・クラスメイトがお別れ会を開いてくれた

・体育祭など学校の行事に参加した

・クラスメイトの優しさ

・サプライズ誕生日パーティーを開いてくれた

・ホストファミリーと一緒に過ごした

・部活でみんなと頑張って成果を上げた

・たくさんの良い仲間に出会えた

・部活の友達に、留学生と思われず「前からずっといるような感じ」と言われた

・体育祭で友達と一緒に仮面ライダーのコスプレをした

・最初の授業の日、あるクラスメイトが何も言わずに教科書を貸してくれて、その優しさに感動した

Q 日本の生活で大変だったこと、辛かったことはなんですか？

●言葉

・授業の内容が理解できなかった
・敬語が難しかった
・現代文・古典の授業
・体育の授業でのマット運動
・ゴミの分別が細かい

●交流

・人間関係作り（友達作り、上下関係など）
・人の輪に入れなかった
・友達と何について話していいかわからなかった

●その他

・気候が合わない（寒い、湿度が高い等）
・寒い冬でも制服のスカートを穿かないといけない
・部活時間と勉強時間のバランス
・生活習慣の違い
・留学最後の時間の足りなさ、
みんなとのお別れ

Q 日本の良いところを紹介するとしたら？

・勉強以外のこと（部活など）にも力を入れている
・学校が生徒たちの意見を大切にしてくれるので、意見を出しやすい
・進路について早い段階から準備しているため余裕が持てる
・学校で自分の好きな分野が研究できる
・事前に計画を立てて行動する真面目さ
・他人に迷惑をかけない
・些細なことでも助け合う
・思いやりの心、優しさ、礼儀正しさ

・環境がきれい、トイレがきれい、緑が多い
・渋滞が少ない
・ゴミの分別を徹底している
・外出先でのごみを持ち帰る（街中にゴミ箱が少ない）
・イベント情報の効果的な発信（チラシ、ウェブサイト）
・テレビ番組がおもしろい

Q 日本で面白いと思ったこと、びっくりしたことなどはなんですか？

●日常生活/社会事情

・信号のない横断歩道では車より歩行者の通行が優先される
・電車やバスが時刻表通りに運行している
・通勤時間が長い
・タクシー料金など交通費が高い
・散髪代が高い
・「5分前行動」、時間をちゃんと守っている
・コンビニ、自動販売機、薬局が多いので便利

・現金支払いが主流
・デリバリーサービスの店が少ない
・白湯を飲む習慣がない、店では冷たいお水が出される（中国では白湯かお茶）

・中古品売買ビジネスが盛ん
・プライバシーや著作権に厳しい
・防災意識が高い
・バリアフリー設備、リハビリテーション病院、デーサービスなどの介護施設が整っている、介護食品も充実している

●学校生活

・通学時間が長い
・登校後上履きに履き替える
・学力以外に、学校行事や部活、バイトの成果も入試成績の一つとして評価される
・部活の種類が多い、レベルが高い、練習がハード、部員皆真面目、ケガしても参加しないといけない
・先生の質問に、椅子に座ったまま答えても大丈夫（中国では立って答える）

・宿題が少ない
・試験範囲が明確、内容が簡単
・成績を公表しない
・昼休み時間が短い、昼寝の時間がない
・昼ごはんは教室でお弁当を食べる（中国では外の飲食店に食べに行ったり食堂で食べるのが一般的）

●好みの色やファッション（制服）、流行の違いなど

・制服が可愛い（中国はジャージが定番）、制服のほかに体操着もある
・寒い冬でもスカート、生足
・女子高生はほぼみんな前髪がある、男子高生の髪型は個性的
・女子高生の女子力が高い
・派手な服装の人が少ない
・休日にメイクをする女子高生がいる、メイクも上手でまるで別人のようにみえる
・ファッション誌の真似をする人が多い

Comment

日本にいると当たり前と思っていることが、留学生にとっては新鮮にうつっていて、これこそまさに異文化交流ですね。それぞれが面白いと思ったことやびっくりしたことについて、なぜなのかを掘り下げてみると、日中それぞれの文化や社会についてさらに理解を深めるきっかけになりそうです。

心連心ウェブ日記

日中交流センターのウェブサイトでは、中国人高校生たちが留学生活で感じたこと、考えたことを、彼ら自身の言葉で綴った日記をご覧いただけます。こちらでは特に秀逸な1篇をご紹介します。13期生が日々感じた色々なことを書いてくれていますので心連心ウェブサイトからぜひご覧ください。

https://www.chinacenter.jp/diary/index/term:13

〈担当者メッセージ〉
こんなにも瑞々しく表現できる感性と文章力に脱帽した日記でした。
姚瑶さんが感じた日本留学生活をぜひ覗いてみてください。
https://www.chinacenter.jp/diary/index/user:fs1810

茶道教室と打上花火

姚瑶さん（愛知県）　投稿日：2018/10/28

秋がだいぶ深まってきた。葉っぱが落ちたり、涼しい風が吹いたりすると、その侘しさに感心する日本は、今楽しんでるでしょうか。
毎日頑張って弓道を練習してきたため、桜丘に来て二ヶ月も経ってないうちに、もうゴムの代わりに、本物の弓と掛けを使い始めた。矢はまだだけど。昨日部活が終わるころ、先生が聞いてくれた「明日の大会だけど、ようようも来る？」
行っても、矢もまだ使ってない私だから、たぶん見学だけ。それでも、本当にみんなと一緒に行きたかった。けど、月に叢雲花に風（世の中の好事にはとかく障害の多いことの例え）か、土曜日に高等部模試があるなんだ。結局行けなかった。
模試が午後二時に終わった。
「せっかく部活がない日なので、前回言った、うちが通ってる茶道教室に見学に行かない？」
私が抹茶好きって言ってたから、こんなふうにクラスメートのうさぎちゃんに誘ってもらった。嬉しく受けた。

日本庭院のおうちに、着物姿で優雅なおばあさんの茶道教室だった。ついたときは、三人のおかあさんが生け花を習っている最中のころだった。私も学ぼうとして聞いたら、生け花の奥義は線と面を上手に組み立てることとわかった。

茶道はどうだろうな。ワクワクしながら、ちゃんと正座して待ってた。

菊で作ったお菓子食べたら、うさぎちゃんの友達が作った一服の抹茶をいただいた。
正直に言うと、流れは複雑だった。
畳の黒線に踏まないこと、室に入るとき、またはお茶をいただくときと出るときは、何回も頭を下げること、まず左足を出すこと、何回もお茶碗をぐるぐる回すこと…
昔の時はね、お茶を作れない人はお嫁になれない時代がありましたよ。今は全然違って、他にもいろいろな選択がありますね。
十一月は、お茶のお正月と言われますよ。
これもおたくの国の昔の景色の絵です。方々が樹の下に座っていて、詩を作る様子ですよ。実は抹茶も生茶も、お宅の国から流れてきたものですね。二つの国は昔から仲良しでしたね。
お水とお湯の音は違うように聞こえますよ…

もう一回には覚えられないほど多くの知識が出たし、私には難しい説明が出たりした。用意してくれたもう一個のお菓子を食べて、また生茶いただいたら、先生から「ようさんは来年七月に帰りますね。茶道は季節によって、お菓子は違いますよ。今日は菊で、三月、四月、五月、また違うお菓子が作られますので、楽しみですね。また弓道の部活がない日があったら、日本文化の体験として、また来ればいいですよ。」って言ってくれた。
ぜひ行きたいと思う。冬、春、夏のお菓子は、何の花で作って、どんな味してるかな。雪を見ながら、抹茶をいただくのは、どんな感じかな。っていうことを、どんどん知っていきたいと思うの。

夜の番組は、飯村花火大会だった。
もうめっちゃでっかい人間に育てられたけど、まず手で持つ子供花火を体験してみた。
手筒見るとき、ふっと思い出した。図書館で本を読んだりしたら、この辺、すなわち三河は、手筒花火の発祥地ということを知った。
「爆発しそうな轟音を出しながら火を噴く手筒を、しっかり抱き抱える。火の粉を被るが顔もしかめず、一歩もたじろがないの三河男児の心意気だ。」っていう紹介があった。
「ね、手筒の最後のポン！っていう音、ちゃんと名前ついてるよ。知ってるよね？」と私が聞いたら、みんなマジ？知らんーって。
「知らんよね。では正解は一？」うさぎは手をマイクとして、私に聞いた。
「『跳ね』です。」と私は答えた。

最後の番組だけと、打上げ花火をみるのは、人生初めてなんだった。
中二の時心連心というプログラムを知った時から、ずっと参加できればと思って、いろいろ頑張ってきた。面接の時、日本に来られたら、何をしたいですかって聞かれたら、一回でも、花火大会に行きたいとすぐ答えた。
マボロシではないか。この時、ここで、この私が打上花火を見てることは。
いろいろ感謝したい。またいろいろ体験したい。
「自分が信じたことを貫け　そして泣いて、泣いて、強くなれ」
という言葉に私は本で出会った。
「私の選択は間違ってなかったって言えるように頑張る」
という言葉を私は友達のラインで読んだ。
充実した一年を送りたいと、私も今強く思ってる。
明日は果物の摘みの手伝いに行ってから、友達との勉強会。楽しみすぎるわー
では、おやすみ。

第13期生 好きなものランキング

あなたの好きな日本のものについて教えてください。

好きな日本の芸能人

1位 石原さとみ/米津玄師（各3票）

2位 Aimer（エメ）/広瀬すず（各2票）

3位 新垣結衣/小栗旬/二宮和也/橋本環奈/山崎賢人/山下智久/花澤香菜/Hey! Say! JUMP/中島健人/中島みゆき/菅田将暉/永野芽郁/明石家さんま/梶裕貴/あいみょん/back number/YUI（各1票）

Comment

昨年同様大きく票が割れました。1位も2位も、今人気のアーティストと女優が同数の票を獲得しました。ジャニーズ人気も根強いです。

好きな日本の作家、作品

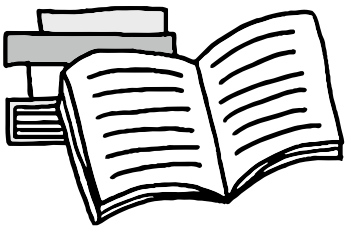
1位 夏目漱石（こころ、吾輩は猫である、夢十夜）

2位 東野圭吾（ナミヤ雑貨店の奇蹟、白夜行、容疑者Xの献身）/太宰治（人間失格、斜陽）

〈その他〉　ノルウェイの森（村上春樹）/藪の中（芥川龍之介）/暁のヨナ（草凪みずほ）/スマホを落としただけなのに（志駕晃）/ジョジョの奇妙な冒険（荒木飛呂彦）/風立ちぬ（堀辰雄）など

Comment

昨年まで3年連続1位の東野圭吾が夏目漱石にその座を明け渡す結果となりました。芥川龍之介や太宰治などの近代文学も、世界的に人気の高い村上春樹も毎年必ず票を獲得しており、幅広い作品が読まれていることが伺えます。



第13期生
好きなもの ランキング

好きな日本のテレビ番組

1位 世界の果てまでイッテQ

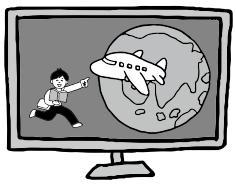
2位 嵐にしやがれ/東大王

3位 人間観察バラエティ モニタリング/チコちゃんに叱られる!/ 仮面ライダーゼロワン

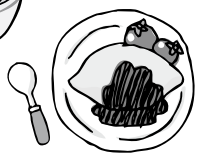
〈その他〉 VS嵐/ZIP!/月曜から夜更かし/目覚ましテレビ/プレバト!!/ジョジョの奇妙な冒険/超逆境クイズバトル!! 99人の壁/99.9 -刑事専門弁護士/名探偵コナン/ナニコレ珍百景

Comment

やはりバラエティー番組が人気のようですが、勉強になるクイズ番組にも票が集まりました。『世界の果てまでイッテQ』はこれで7年連続のランクイン。3位に仮面ライダーが入ったのが興味深いところです。



好きな日本の食べ物



1位 寿司

2位 お好み焼き/ラーメン

3位 オムライス/カレーうどん/納豆

〈その他〉 カレー、から揚げ、たこ焼き、きりたんぽ鍋、おでん、すき焼き、そば、抹茶、卵焼き、クリームパン、ポン酢など

Comment

2年連続1位だったラーメンが今年は2位にランクダウン。1位を獲得した寿司は嫌いな食べ物でも3位にランクインしていて、やはり生魚に対する評価は分かれるようです。昨年は2位がカレーで3位がうどんでしたが、今年はなんとカレーうどんが3位にランクインしています。

番外編

嫌いな日本の食べ物

1位 納豆

2位 梅干し

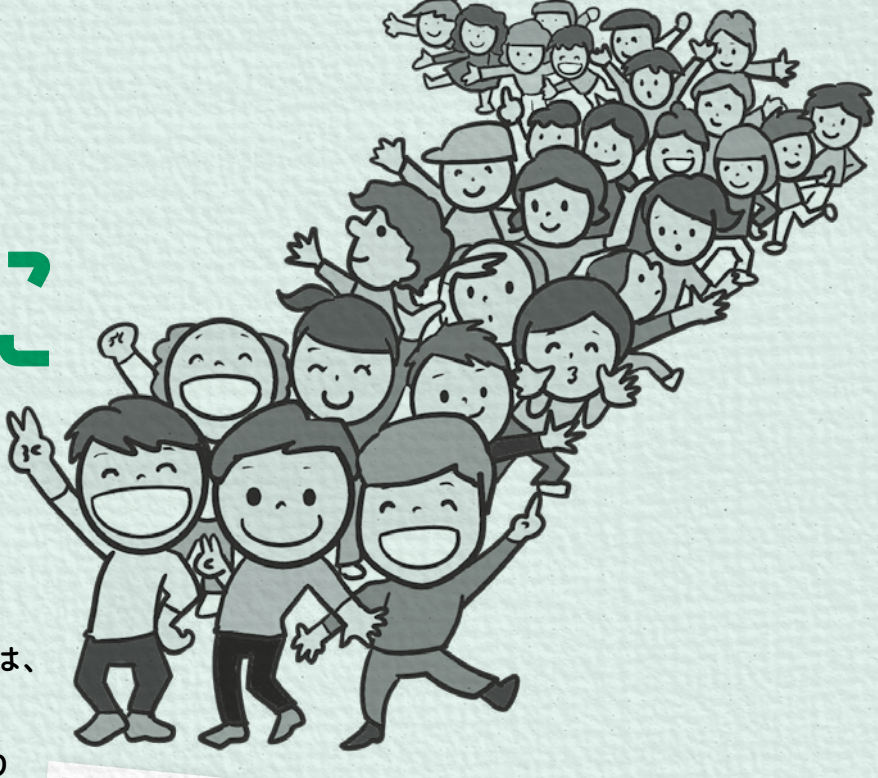
3位 刺身、寿司

〈その他〉 生姜、シナモン、明太子、わさび、ポタージュなど

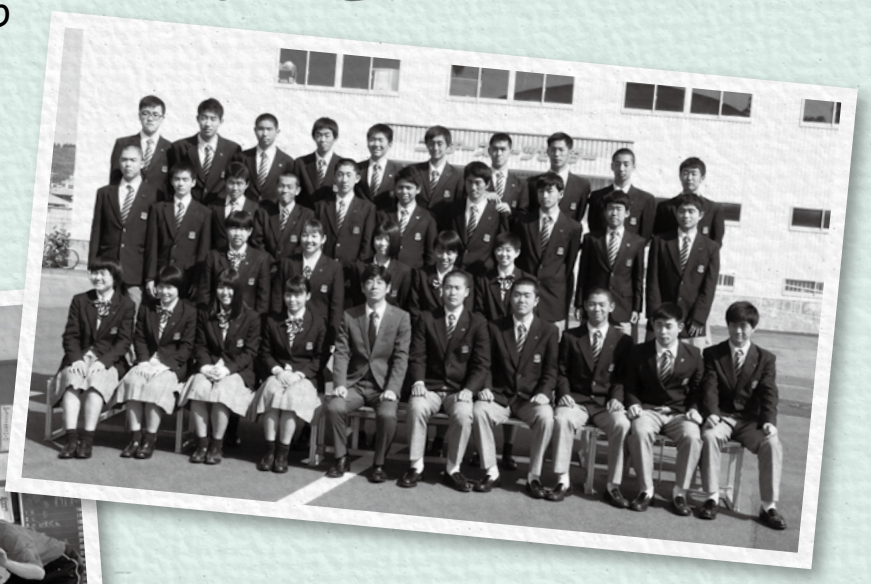
Comment

今年もワースト1位は納豆となり、これで8年連続です。一方で、今年は好きな食べ物の3位にもランクインしていて、第13期生では好き嫌いが分かれるようです。

帰国を前に
―作文集―



親元を離れてやってきた日本での11ヶ月間は、
笑いあり、涙ありの充実した日々でした。
帰国前に、13期生に日本での生活を振り返り
作文を書いてもらいました。



一つ一つの機会を大切にし、前に立ち向かう

酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校／福州外国語学校
陳　鈺加
CHEN Yujia

日本での留学生活は約ただの一ヶ月しか残りません。ここに来て十ヶ月経った私は、日本に来る前の憧れ、どきどきした自分はまだ目の前にあります。

初めて日本の町を見た時、それはアニメや漫画では体験できない感じでした。綺麗な街道、中国よりずっと少ない高いビルの間で見た澄んだ青空、新幹線のガタンガタンの音と通った時の風などなど全部日本の色です。想像できない中国と違うことが次々とやってきた時は、イメージした留学生活は現実と大きな差があることを気づきました。

一番最初は生活習慣の違いを感じました。薄く甘い和食の味、いつでもどこでも注意すべき礼儀、複雑でわからない電車の線路図、中国と違う空気すら不安になります。特に考え方の違いを感じた時、本当に知らない国に来ましたなあと実感しました。

それから学校に入り、本当に知らないことばかりで、積極的な態度を持っていますが、気がついたらもう不安で疲れてしまいました。日本語がまた上達していないので、話すのはともかく、先生の授業の内容もわかりつらいし、クラスメイトの話しもよくわからないです。そして学校のルールとか全然知らないので、本当に細かいことに一つ一つ気を使います。

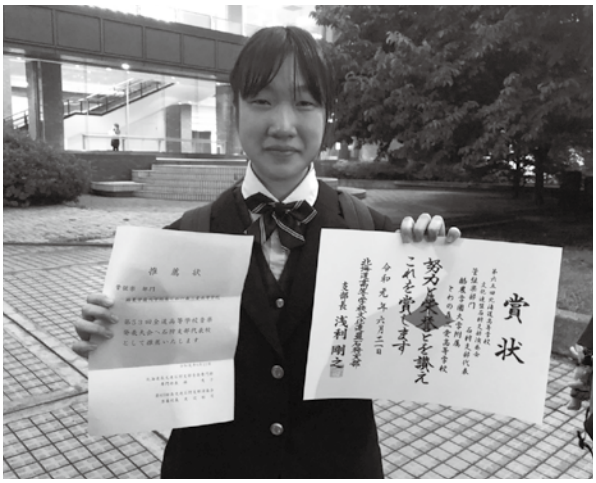
しかし、今振り返ってみれば、自分の想像以上に日本に慣れていないだけのことです。2ヶ月ぐらい経つと、私もどんどん慣れてきて、情緒もどんどん安定になりました。だから、もっと有意義な留学生活を過ごすために、自分の好きな音楽もやりたくて、音楽部に入り、バイオリンと合唱をやり始めました。先輩たちも、顧問の先生も、みんなとても優しくて、いい人ばかりで、一緒にいろんなイベントに参加しました。合唱もバイオリンもむづかしく、頑張ってもうまくいかない時もありますが、仲間たちが支えてくれて、楽しかったです。この留学生活のとても重要な一部だと思います。

それから、2月ぐらいの時、留学生活約半分経ち、私はもう完全に日本になれて、ほとんど毎日楽しんでいます。

今考えてみれば、この日本の留学生活は本当に私に沢山の「初めて」を与えました。初めて雪を見ました。日差しでキラキラ輝い、北海道の青空ととても似合って、美しいです。初めて日本のお正月を体験しました。違う文化を体験する同時に、同じく家族の暖かさを感じました。初めてスキーをやりました。最初はずっと転んでいますが、できた時は何の痛みも忘れたぐらいの達成感でした。初めてボランティアしました。体不自由な方に自分の僅かな力を捧げるだけで、嬉しかったです。ほかにも沢山数え切れない初めてはあり、初めて花見に行きました、クラスメイトと学校行事しました、グループの人と店の取材に行きました、自画像を書きました。そして、初めてこんなに離れたくない人達がいました。もう2度と会えないかもしれないからです。

また、今度の留学生活で、改めて時間の大切さを知りました。ひとり暮らすで、いつも私の傍にいる両親がいなくなり、自己管理はよっぽど大切になりました。部屋の掃除、一日三食、遊ぶ時間，勉強する時間と睡眠時間のバランスなどなど、全部自分でコントロールしなければなりません。ですから、少ない一年の中で、一つ一つ与えられたチャンスと時間を大切に利用し、行動すべきだと思います。

この留学生活の感想は本当に色々ありすぎて、話せないです。人間関係やプレシアなどの悩みもありますが、本当に甲斐がある一年で、成長した自分が見ました。この心連心のプログラムに参加してよかったです。



ここに近づくほど、ここを愛する

立命館慶祥中学校・高等学校／済南外国語学校
劉　澤華
LIU Zehua

そろそろ帰ることに気づいたとき、意外に速かったと驚いた。来る前に、どうやって、一年間を過ごすかとちゃんと考えていたが、振り返ったら、心配する必要がもはやなかった。知らないうちに、すでに日本での留学の生活になれた。寮長さんの「行ってらしゃい」も、晩ごはんの味噌汁も不可欠の日常になった。

来たときは秋の末だった。初登校が木曜日で、ちょうど担任の先生の休みだったから、会えなかったが、それにもかかわらず、担任の先生があとの私の学校生活をささえてくれた。それに、私の担任の先生がちょっとほかの先生と異なり、私達の席を週に一回変わらせたり、月に一回「あいのわい」という勉強の心得や人生の感銘など大雑把な内容が含まれる雑誌のようなレポートを作ったりしている。あちこちで感じたのはそのあまり笑わない担任の先生の曖昧な優しさだ。

いよいよ、冬に入った。11月に、札幌の交流会にでて、今でもずっと連絡している友達に会った。驚いたのは友達は日本人なのに、寿司とかが苦手だといったのだ。ちょうど、その時、地理の先生にある中華料理屋を勧められたから、連れて行った。確かにその時、友達が「何これ、寿司よりずっとうまい!」と言って、私が面白いとしか思えなかった。

真冬に入ると、気温もっと下がって、イメージの北海道と同じほどの雪が降った。とまらぬ雪が積もって、積もって、膝がうまるくらいになった。クリスマスのごろはホストファミリーの大川さんのうちで一緒に過ごした。大川さんはいつも自分の料理がうまくないというが、私が手作り料理を食べるたびに特別な美味しさが味わえる。それはたぶん家の味わいだと思う。

ようやく春が来た。けれども、残った雪が全部溶けるまで、まだ時間がいる。沖縄はさくらが咲いている間に、こっちの花はまだ芽が出なかった。ちょうど高体連の時期だ。私と柔道部の部長が試合に出た。一勝でよいとは言えない成績をとって、部長も自分の高校時代の最後の試合を迎えた。その時には、私もあるスピーチコンテストに出られなかったから、気持ちも落ち込んでいた。私達はお互いに慰めないで、JRに乗って、帰った。ただ途中にこんな会話があった。「よく頑張ったな」「うん、おまえもな」

今考えてみれば、それは同情ではなく、自分の努力を認めることだ。成長できたら、それはもはや成果より大切だ。

この一年間、いろんな人に会えた。冷たそうだが、実は優しい先生もいる。寿司より中華料理のほうが好きな友達もいる。素直ではない、料理上手なホストファミリーもいる。それに、失敗に前を向いた部長と私もいる。日本人と日本について、すでにイメージが変わった。ここに来る前に、よく受けいれられるかと怖かった。でも、元は記号のような「日本人」がもはや鮮烈な人々に認識が変わるにつれ、日本人に近づくほど、ここをもっと愛するようになった。

蝉がうるさく鳴いている、夏になった。私はそろそろ帰るか。お別れの涙を落とさずに送ってもらいたい。涙はいらない、私は必ず戻る。半分の心がここに残ったから。

光陰矢の如し

盛岡中央高等学校／上海市甘泉外国語中学
夏　晗
XIA Han

一年間の留学生活は瞬く間に終わりました。まるで夢幻のような経験は私の人生の中でもっとも忘れがたい思い出です。

去年の九月に遡ると、最初のときは緊張で期待している気持ちで日本に来ました。でも、実は常に予想どおりにいかないです。その時の私は日本に来たばかりで、文化の衝突、言語の違い、クラスの人たちと想像より親しくない、希望の生活となかなか違います。私は一時に迷い、影響悪いことをしてしまうこともありました。

でも、私は日本に来る時の初心に刺激され、最初の私にかえりました。私は交流のため、視野を広げるため、成長のために日本に来ました。この初心を忘れず、だんだん日本の生活に慣れてきました。

この一年はいろいろなことが起こりました。まずは学校生活から始めましょう。生活を充実するために私はバスケ部に入りました。だんだん練習に慣れて、部活の人たちと友達になりました。大会の時はみんなと一緒に遠征して、先輩たちの試合の時の姿とにぎやかな応援の声が私の心を震撼しました。試合の後、みんなと一緒に温泉に入ったり、話合ったりして、素晴らしい思い出でした。もっとも印象深いのは5月の高総体が終わってから、三年生の先輩たちが引退することです。その別れの場面はなかなか忘れられません。部活は私の学校生活の中で一番楽しい時間でした。

部活以外は、クラスの生活の時間です。クラスメートと弁当を食べたり、話合ったりして、仲良くなって、気軽に相談できるようになりました。学校で勉強するうちに日本の教育に詳しくなりました。成績を重視している中国に比べて、日本は考え力を重視しています。例えば、小論文や自由研究などによって、問題を発見して解決する能力が鍛えられます。それに、この学校で、人間関係や自分の進路についての考え方などもいろいろ勉強になりました。

学校以外に、私は何回かホームステイに行くチャンスをもらいました。初めてのホームステイの体験は同じクラスの友達の家です。ちょうど新年の時なので、友達の実家の大槌町に行きました。元日に神社に初詣しました。日本の文化を体験できてよかったです。大槌のイメージはちょっと荒涼でした。なぜならば、大槌は東日本大震災の被災地です。被害に遭った写真を見て、今ここで生活している人たちに本当に尊敬しています。逆境でもしりごみしない精神は素晴らしいだと思います。春の時もホームステイをやりました。5月は花見に行って、6月は東北絆祭りに行きました。岩手の美しさが見えました。ホストファミリーと交流して日本の文化も詳しく知りました。

この一年、私は日本の生活に慣れて、普通の高校生みたいに生活していました。毎日はほぼ同じ、時々この生活が退屈だと思いますが、ここで自分の居場所を見つけて、周りに溶け込んで、日本高校生の視点から学校生活を体験して、日本の文化を学ぶことは私にとって本当に宝物のような経験でした。

最後、私は学校の先生たち、生徒たち、ホストファミリーたち、心連心の先生たちに心から感謝しております。私はここで勉強したことは忘れない、中国に帰ったら、日本の大学に進学でき、また日本の土を踏めるように、もっと頑張りたいと思います。

今が最高

明桜高等学校／西安外国語大学附属西安外国語学校
王　語馨
WANG Yuxin

「あなたが、日本社会に適応し難いことって何だと思います？」
「先輩後輩関係…ですかね。先輩の前で自分が何をするべきか迷います。」
時を最初まで巻き戻し、面接してくれた先生に、私はこのような答えをしました。
実感もなく、私の高校一年の夏、塾と課題とさよならして、日本への留学生活を始めました。来日研修のマナー講座で、生活的な基本礼儀について学びました。ですが、この後生活中の注意すべきことは、もう教える先生はいません。後は自分で味わいながら、体験するしかないのです。
期待も、不安も合わせ持ちながら、来日研修を終えて、留学先の秋田に来ました。
ここで、待っていたのは、ホストファミリーの大友さんでした。私のことを「西安から来た娘」と呼び、若者に負けない面白さと根性を持っているお父さんと、料理が上手で、とても優しいお母さんでした。今でも、家に着いた日の夕飯のカレーを思い出します。それを食べる前はまだ実感がなかったのが、お父さんと自然に話し合えたり、お母さんの手作りのカレーを食べたころから、それまでの不安と緊張が急になくなり、初めて初対面の人の前で涙をボロボロ流しました。
でも、最初はただ、最近ミスしたことや間違えていたことを考えて、明日もっと完璧にするため毎日反省していました。ですが、ある日、お母さんは私の顔を見て、「けいちゃん、いつも疲れてるように見えるね。もっとリラックスしてもいいよ。」と言ってくれました。
そうですね、この時は今の気持ちを伝えられず、ただ「次はなにをやるべきか」ばかり考えていました。その後、私も今の生活に慣れて来て、大友さんの娘になりました。学校では、「挨拶すること」を大切にしています。先輩や先生に会ったら、必ず挨拶するし、部活の部員たちと仲良くなっても、部活終わりの挨拶とミーティングの時間はきちんと守ります。
「先輩後輩関係」に対する考えも変わり、「先輩を尊重する上に後輩として認められたい」のは今の自分です。
私が入ったのはチアリーディングで、意気投合した仲間たちと一緒に活動していました。そして、一緒にお弁当を食べたり家に帰ったり、テスト勉強したり先生とおしゃべりしたりして、友達もいっぱいできました。毎日学校が楽しみで、すぐに学校生活に慣れました。
今年の5月、野球部が県大会決勝まで行って、私はチアとしての初応援になりました。デビュー戦の不安と緊張は、最初の「戦闘開始」と言う曲と一緒に流れました。先輩と野球部から、今の得点や、難しいルールなど、いっぱい説明してもらいました。みんな自然に拍手したり話し合ったり、戦っているその人たちに突き動かされるように、夢中で応援しました。
最後エール交換のとき、みんな起立し、相手に対する敬意を持って、頭を下げました。教えられたわけではないですが、その場にいて、自然に行動に移していました。教科書のない一年間、私を最初の不安から、だんだん落ち着かせたのは周りのみんなでした。わざわざ自分のやるべきことを考えるのではなく、今の雰囲気に入って、今の気持ちを表して、今しかできないことを楽しんだら、それが一番です。
複雑に考えなくてもいい、やるべきことは、「今を生きる」しかないです。
今後の人生も、この大切な経験を持ち、もっと前向きになって頑張ります。日本での宝物のような出会いを胸に、これからも夢に向かって走り続けていきたいです。

時空の旅

埼玉県立蕨高等学校／東北育才学校
邱　一鳴
QIU Yiming

目を閉じて、静かに呼吸をしながら、私はだんだん夢の世界に落ち込んでいく。気がついたら、ドラえもんのタイムマシンに乗って、2018年4、5月頃に戻った。心連心プログラム参加の申請と面接の時だ。結果を待っている間はいつも「日本に行けるかな」や「うまく周りの人と話せるか」などのたくさんの不安と緊張を抱えていた。

それから、あっという間に時は9月になった。両親や友達などのよく知っている人と離れて、全く新しい環境にいた私は、研修の間少しずつ慣れてきたとはいえ、やはり1人で他郷にいる寂しさが溢れた。その後、初めてのホストファミリーに出会った。青海さんは日本のことや蕨高校のことなどをいろいろ教えてくれ、どんなに小さいことでも聞いてくれて、本当に心の拠り所になった家族だ。そして、蕨高校での留学生活が始まった。学校に行って、日本と中国の違う所はこんなにあるのだと気づいた。例えば、昼休みにお弁当を食べること、みんな部活に入って頑張っていること…そして、合唱大好きな私は音楽部に入った。段々日本の日常生活に慣れて、大切な友達もできた。大好きなアイドルの話をしたり、バカな話で爆笑したり、休日にいろんな所に遊びに行ったり、たまに一緒に勉強もしたり…彼女たちとの時間は本当に楽しくて、いつまでも忘れられない宝物だ。

時間は一秒一秒過ぎていき、いつの間にか年を越して、2019年2、3月頃になった。ホスト先は吉田さんに変わり、前の家とまたいろいろ違う新たな生活を楽しんでいる私がいる。定期演奏会前の部活を一所懸命頑張っている私も。そのころ一日中練習する日が何日もあり大変だったけど、練習と先生や先輩方からのアドバイスで、自分の声の出し方や歌い方もだんだんうまくなってきた。今の私から見ると、とても懐かしく、成長した時期だ。

タイムマシンに乗って見た私の留学生活は辛かった時もあったが、全体的には楽しく過ぎていった。日本語も体も心も大きく成長した。一番強くなったところはやはり心だと思う。不安と寂しさに満ちた心はもう溢れるほど幸せや思い出でいっぱいになった。ここで私に優しくして、いろいろ教えてくれた先生方、いつもそばにいてくれる友達、大変お世話になっているホストファミリーに「今までありがとうございました！」と伝えたい。皆さんのおかげで、私は1年間まるで夢のように充実して楽しい生活を過ごすことができたのだ。

Dididi……隣でアラームが鳴っている。私はタイムマシンから降り、現実に戻る。もう朝6時、いい夢を見た。1年前から今日までの時空の旅をして、過去の自分と出会った。本当はこの夢が覚めないでほしい、まだやりたいことがいっぱいある、日本をもっと満喫したい。でも、そろそろ起きないと、前へ進まないと。残りの時間をエンジョイしよう、たくさんの思い出を残そう！ある日またタイムマシンで時空の旅をして、この頃に戻ったときに、自分が悔しく思わず、留学生活を存分に楽しんだと思えるように。

一心不乱

東京学芸大学附属国際中等教育学校／
西安外国語大学附属西安外国語学校
代　恩鳴
DAI Enming

時間が経ち、真夏の夜の夢とともに、帰国の日は新幹線に乗るような速さで来ました。この一-年間、いろいろな勉強や旅行と共に、落ち込まずに、走るほどに、踊るほどに、ふざけながら、散らしながら、私は変わった（布施明）。

日本に来る前に、中国のメデイアから、日本の「怖さ」に深く沈んで、すごく緊張しました。でも、こういうようなことを経験したことがないから、好奇心を抱いて、この恐怖は少しの期待に替りました。そんな緊張と期待は胸に萌え始まった。日本の留学生活は予想以上に充実したものでした。私にとって一番ラッキーなこととは、東京の学校に行くことが決定され、交通の便利な所に行きました。毎日の通学はただの地獄で形容できませんが、連休や週末にも都内都外のいろいろな所で見学ができて、私の趣味にあいました。私は、去年12月は電車で関東に回ることにして、次々30箇所以上に至りました。若松、小田原で悠久な歴史のあるお城に驚かせ、日本の伝統文化に興味あるようになりました。東京、名古屋で、高層ビルの間で残される古代建築は、この都市の活力と風韻を鑑賞して来ました。仙台の美味しい牛タンを味わって、日中両国の東北地方が飲食についての独特の審美が共通しているのを了解できて、寿町のまずい雑炊を食べながら、原発の被害地域に行きながら、私は、日本と中国が同じ、泣きながら前向きにしている国だとわかりました。

この一年間で、私を変えたのは、このISS（略称）という学校です。私の学校は国際的な学校で、普通の高校とは違い、帰国生と留学生が多いです。この学校で多面発展を強調している教育を受ける私は、課題や討論会が多く、毎日忙しかったです。けれども、とても充実した生活を過ごしたと感じました。この一年学校では大きな行事、「文化祭」や「スキーの教室」やスポーツフェスティバル等、中国の学校で体験した事はないことでした。

文化祭ではたくさんの出し物があって、その中でも、私四年生はお化け屋敷を作りました。皆さんと一緒に暗幕をはったり、看板を作ったり、ゾンビに化粧したりしました。文化祭当日には、お客様がたくさん来られて、同期生の鄧さんも来て、お化け屋敷のことを褒めてくれて非常に嬉しかったです。ほかのクラスの展示を見て、来日一週間の私がショックを受けました。四年生の「一心不乱」という精神も、私の行動基準として貫徹してきました。

ホストファミリーとの生活も学校での生活と違った楽しみがあります。週末に一緒に外出したり、文化参観をしたり、マラソン大会のボランティアをやったり、いろいろなところに行ってみて、日本の文化と風俗についてもより深く理解しました。日本の方と一緒に過ごす毎日はとても楽しく、本当に感謝しきれないです。

令和の強風に乗って、日本の留学生活はカウントダウンほど短くなり。いきなり、楽不思蜀（劉後主は楽しくて蜀を思わず）の感じがします。日本にいる間受けた先生方のご指導、ホストファミリーのいろいろな教育を受けて、とっても助かりました。心から感謝の気持ちを伝えたいです。この一年間は本当に充実した生活をくださいましてありがとうございます。帰国の後、日本の生活と感動を忘れずに、「一心不乱」のやる気を出して歩いていきたいと思います。

これより、この一年間私を助けてくれました人たちに、「お疲れ様でした！」を差し上げます。

成長した一年

明治学院東村山高等学校／蘇州外国語学校
陶　詩涵
TAO Shihan

一年間の留学生活はそろそろ終わります。まだもう少し日本にいたいけれども、帰国する時がもう来ました。この一年間たくさんの思い出が出来ました。

私は九月からお正月まで東村山市のいろんなイベントに参加しました。運動会やいろんな方々との交流もしました。そのなかに、金山神社のお祭りは一番印象に残っています。あの時、私は初めて浴衣を着ました。最初のホストファミリーの家族と一緒にお祭りに行きました。とても楽しい時間を過ごしました。学校で人生初めての文化祭をクラスメイトと一緒に準備して、いい体験をできました。

十二月以降、ホストファミリーが変わりました。それは私のその一年の留学のターニングポイントでした。それから私は少しずつ問題を発生しました。でもホストファミリーのお母さんと一緒に問題を解決し、私の体調も良くなりました。高二から素晴らしい留学生活を過ごしました。私は歴史が好きですから、ホストファミリーといろんな博物館や観光地に行きました。日本の歴史や文化などを勉強して、新しい知識をたくさん学びました。それはとてもありがたいことです。

すごく仲いい友だちを作りました。聖歌隊に入りましたから、はじめて日本の高校生と遊びました。（映画見に行きました。）学校でもイベントを参加しました。先月、同級生と一緒に讃美バンドをつくって、高校生全員の前で歌えました。音楽が好きですけれども、なかなか皆の前で演奏のチャンスはありませんでした。

六月の頭、私の人生のなかにたった一回の修学旅行が終わりました。たくさんの見学地に行き、原爆と平和や隠れたキリシタンと貿易などの知識を学びました。被爆者の講演を聞き、原爆資料館と被爆の場所に行って、戦争絶対しちゃいけませんの気持ちが深くなりました。私はクラスメイトと一緒に宿泊のことがありませんでしたから、今回の修学旅行でたくさんの思い出を作りました。すごく楽しかったです。私も行動前に計画表を作って、そのまま計画通りに行動できる、時間をまもることを学びました。これからも行動前に計画表を作りたいです。

五月から、ホストファミリーのおかけで、蘇州の小学校と東村山市の小学校を知って、中国の小学生が書いた書道を翻訳しました。「私の蘇州」というpowerpointを作って、小学生に私のふるさとを紹介して、小学生と交流しました。未来は自分が音楽の先生になりたいです。今回のことをすごく役に立てますと思います。

一年間の時間はそんなに早いと思いませんでした。こんな有意義な一年間の留学生活が本当に良かったです。この一年間助けてくれた先生とホストファミリーの皆さん、ありがとうございました。

これから私は素晴らしい人生を作りたいです。

手を伸ばして、日本へ届けー僕の物語

横須賀市立横須賀総合高等学校／長沙外国語学校
鄧　博文
DENG Bowen

夜、目を閉じるたびに、「日本の留学生活、また一日がなくなったね」のようと考えます。夢を見るようだけど、この忘れ難い旅が、もうすぐエンドになるよね…。私はまた子どもの頃から、外の世界を楽しみにしている、最初の時、世界は中国ただ一つの国があるだと思った。

「日本」

この言葉を初めて聞いたら、その中国と全然違う、「異世界」のような幻想世界へ、僕の好奇心が熱くなって、そんなところへ見に行きたくなる。けど、ずっと高校まで、その美しい場所は空の中にある星のように、どんなに欲しいでも、この手が届かない。ただ毎晩に眠れたら、僕の夢のなかに浮かぶ。

でも、この願いは、2018年の9月に叶った。面接に合格した僕は、ついにこの国――「日本」に自分の足跡を残した、目に入れる全ての文字がだんだん日本語になった時、心はもう驚きじゃない、それは言葉で言えない興奮感。けど、それはただその空の形骸だけだ。

1ヶ月の体験を過ごしたら、いろんな悩みがよく出て来る。日本語が苦手で、クラスメイトとの交流は障壁が存在している。僕も、外国人と話すことを怖がる。ここに来た前にその意気が無くなった。「いっぱい」は言わずもがな、「一人の友達」までも作られない、これは僕が一番困った問題になった。あの時僕も“どうしょうかな」と思って、何度も自分の自信を出したい。けどそれは自分の思いより難しい、挨拶の言葉が口からすぐ溢れそうの時、心が「無理、出来ない」と言え、そして沈黙のままに離れた。　「日本人と話したいと思っているこの僕が、なぜ話したい言葉が出られない」僕は何度もこうやって考えた、今日にまた考えて、その答えは浮かび上がってくる、それは私自身の中にある「外国人」という意識が、自分で自分を皆から排除させた。元々に自分がみんなと同じであるということを認めないから。

でもそうじゃない、実に僕は飛べる鳥、ただ誕生の場所は鶏舎、僕が、いや、僕たちが手を開いても構わないと思っている限り、僕たちは飛ぶことができる。今、空に届かないなら、空へ飛んで行くよ。そして手を伸ばす、雲も必ず手に入れる。

中国と日本一番な同じところは、中国人でも日本人でも、誰でも生活のために、一生懸命に自分がするべきことをする、社会人と学生、仕事と授業。中国人として、日中関係の交流使者として、そういう一生懸命なこと、僕たちも頑張ってやるべきだ。

僕には、この一年間、またやりたくて叶わないことがたくさんあります。後悔すること、残念だったことなんかもあって、出直すことが出来れば、必ずどうにかして叶えに行く。けど日本に来たことは絶対に後悔しない。今の僕は、この空に届いた。鳥のように、この空で自由に飛ぶ。ここで僕と出会ったみんな、偶然でも、僕には一番大事な人、中国に帰る前に、この高校、ホストファミリーで作った全ての瞬間を、心の中にある「思い出」という珍しいアルバムに入れて珍蔵する。

目を覚まして、さあ、帰ろう。

旅立ちの日、夢始まる日

長野県長野西高等学校／六盤水市第三中学
馮　艷群
FENG Yanqun

9月4日、私は飛行機に乗って日本に来て、この日、夢も始まった。飛行機の中で私は初めて海を見て、真っ青な広い海、空と一緒につながっています。私の心はとても興奮して、ドキドキして、何度もこの日を幻想して、この日が来る時またそんなに夢のそんなに真実ではありませんと感じて、しかし私の目は私に教えて、これは本当です。

飛行機の中で、私たちは昼食に美味しい弁当とアイスクリームを食べ、たくさんの写真を撮りました。3時間以上の飛行はすぐに終わり、私たちは羽田空港に着いた。私たちの留学生活もここから始まりました。日本に着いてから、まず東京へ行きました。3日間の研修を受けました。その後、それぞれの生活地へ行き、留学生活を始めました。

新幹線に乗って生活地の長野に来ました。長野に来たら、まるでふるさとに帰ったような気がします。長野の景色は私のふるさとの景色とよく似ています。周りにたくさんの山があって、快適な温度、たくさんの森があって、これは私を驚かせました。長野駅に着いてホストファミリーのお母さんとお姉さんに会い、緊張してあいさつをしてから一緒にいました。ホームステイのお母さんが中国人だということを知って中国語が話せることを知り、お姉ちゃんも中国語を話せたのでとても嬉しかったです。彼女たちと話すことを心配しなくていいから。家に着くと、ホストファミリーのママは私に家のことをすべて紹介してくれて、真剣に聞いていました。そしてホストファミリーのママの言葉を覚えてくれて、ホストファミリーのお母さんはとても優しくてくれて、緊張した気持ちがほのかになりました。今日から11か月の時間を彼女たちと過ごすことになり、私は彼女たちとの生活を楽しみにしています。

2日間の準備を経て、9月10日に私は学校に行って私の学友と先生たちに会うことになっていましたので朝からずっと緊張していました。先生とクラスメイトに良い印象を持ってもらいたいと思い、ずっと自己紹介の練習をしました。まず私の担任の先生に会いました。先生はとても若いです。先生の笑顔は私の緊張した気持ちをリラックスさせてくれました。先生が私を連れて教室を訪れた後、壇上に私から自己紹介のとき私に非常に緊張し、生徒たちが私を見て、私の掌に汗がたくさん出て、頭の中が真っ白、練習した自己紹介も忘れて、しかし深呼吸すると、私の心は冷静になり、自己紹介を始めました。自己紹介が終わった後、クラスメイトのみんなは拍手してくれました。嬉しかったです。笑いました。緊張した気持ちもほぐれました。このように、私の留学生活は順調に始めることができました。

それから私は書道部に入って、書道部の先輩たちと一緒にさまざまな活動に参加して、書道部の先生はとても明るくて、とても親近感があります。今日まで、留学生活は三百日を過ぎて、この三百日の中で、私はたくさんの友達ができて、書道部の先輩たちといろいろな活動に参加して、ホストファミリーと一緒にいろいろな所に行って、毎日を充実させて楽しく過ごして、私もたくさんの日本語を学びました。

千字の作文では、この一年間の私のすべての生活や経験を記録することができません。一年の時間もおもしろいことを全部経験させてくれません。でも、この一年は本当に楽しかったです。

1年の時間は本当に速くて、手の中の砂のようで、瞬く間になくなって、私たちの留学生活は終わって、それから私たちは自分の郷里に帰って、元の自分の生活に戻ります。しかしこの1年の生活を私は決して忘れません。ありがとうございます。クラスメイトの皆さん、ホストファミリーのお母さんやお姉さん、この一年間ありがとうございました！

四季の唄

桜丘高等学校／済南外国語学校
姚　瑶
YAO Yao

～プロローグ・秋～

先生の車から降りたとき、ちょうど夕焼けが綺麗なところだった。荷物を下ろし、桜風寮に入ると、積み上げられた剣道具と、横になって廊下で寝てた（?!）子が目に映ってきた。

「なんでここで寝てんの?」と、先生が笑っちゃう。ごまかしながら、立ちあがって逃げちゃった子の姿を見て、私も思わず笑いだした。これは桜丘と出会って初めてのシーンだった。自分の留学生活への色々な不安を、一気にリッラクスした気分に転換してくれた瞬間だった。

～ウキウキした冬～

思い出せば、それは辛さと楽しさが混じり合って、人生一番カラフルな冬だったかもしれない。

ガラスと猫が住んでいる神社、りんご飴を食べながら歩いてた坂道、品揃えがみごとすぎる中古店。それに、クラスの全員全力で作り上げた学園祭企画、袴姿がかっこよくてたまらない先輩がいる弓道部、可愛い制服、天の果てにある紺色の山、海の匂いのする風…周りの人々にいろいろ教えてもらえたおかげで、私はこの新鮮な世界を探索し続けた。

～落ち着いた春～

「『桜丘』ってことは、春になると坂道の桜がすごいことだよね?」と聞かれると、微妙な顔した友達。「お花見なら、一緒に岡崎とか行こうよ～」

こういう会話で、春の到来を迎えた気がする。

新学期が始まって、文系選択に進むと、生物の授業が少なくなっちゃった。でも、生物担当の順久先生の、世界中をひとり旅してた話やっぱ大好きだった。

「…その前何やってたというと、皆さん、マザーテレサという人知ってますか?ノーベル平和賞の受賞者で、ずっとインドの困ってる人々を助けてた、すごい偉い人ですよ。…僕はね、彼女の事を聞いたら、どうしても会いたくて、一緒に働きたいと思って、インドに行きましたね。で、マザーテレサがなくなる前、ずっと一緒に働いたんですね…」

私は、この話を聞きながら、窓外の生き生きした新緑を眺めていた。この頃、心も落ち着いてきたので、いろいろ考えたはず。「日本と中国は確かに絆が深い。でも、両国の人の世界の受け止め方とこだわりは、全然違うんだね。」や、「自分が十数年ずっと、当たり前だと思って、信じてきたことは、ただ特定な地域、一時期の現象の余波に過ぎないんだ。」とか。弁論大会の応募などでも、自分の思ったことを伝えようとした。

ここまで頑張ってきて、自分は確かに成長したはず。日本文化を満喫し、友達もできて、毎日楽しく過ごしてきた。しかしながら、自分の未来に関わることにくると、結局わからなくなる。

でも、順久先生の話を聞いて、やっと気づいたことがある。それは、一番大事なのは、「一緒に働きたいだけで会いに行けた」というような、流石に日本人なりの、感心すべき赤誠な考え方に違いないと、私は思いました。このことを、ずっと覚えておいて、自分の未来に生かしたいと思います。

～エピローグ・夏～

日本は季節の移りに気が利くのか、それとも、日本の季節は特に鮮明なのか?遅くなってゆく夕焼けだとか、この梅雨時期にある全ては、去年の夏の記憶を思い出させた。速いんだね。もうすぐ、この元の自分から脱出するような、夢が叶ったような、辛抱を鍛えて、いい思い出をいっぱい作れた一年間は、終わりを迎える。これはきっと、青春アルバムの中で、1番輝くような1ページになれると、私は信じている。

「大切なことは、言葉にならない。」ただ、皆さんとの出会い、本当に奇跡みたいで、ありがたく思っています。1年間ありがとうございました!

ぜひ、また会いましょう。

出会えて良かった

光ヶ丘女子高等学校／天津外国語大学附属外国語学校
趙　子玥
ZHAO Ziyue

去年の夏、北京で両親と別れて、東京に向かう飛行機に乗っている時、私は気づきました。私の留学生活はその時始まったと。アニメにふけっている私は「未知な旅が始まった」というセリフを思い出しました。

そして、今までもう11ヶ月が経ちました。アジサイが雨中に咲いている時、振り返ると、楽しいことや残念なことが全部思い出になって、宝物として私の胸にあります。

光ヶ丘高校に来てから、初めてクラスメートに会いました。とても元気な女の子たちでした。休憩時間にみんなが自分の名前を教えてくれて、私に覚えやすいために、ノートにも書いてくれました。まだ何も分からない私を優しく受け入れて、クラスの一員にしてくれました。中国と日本は互いにとても近い国ですが、文化の違いはやはりあるのです。クラスの友達がよく中国についていろいろ私に聞きました。私もよく日本文化と日本の生活習慣について聞きました。このようなコミュニケーションによって、友達は中国のことにもっと詳しくなって、私も勝手に思っていた様々なことが実は全然そういうことではなかったと分かりました。例えば、私は曾て、日本人はみんな真面目で、人に対してとても冷たいという印象を持っていました。実はそうではありません。日本にも暖かい心を持っている人がたくさんいます。困っている時何も気にせず、手伝ってくれます。全員が真面目ではなく、たまにおっちょこちょいな人もいます。このような日本は私にもっと親近感を与えました。

この11ヶ月の中で、いろいろな学校行事に参加しました。文化祭、体育大会、合唱コンクール、球技大会、どれもこれもクラスメートが全員で準備して、練習して、精一杯頑張りました。体育大会の閉会式で、全校生が隣の人と肩を組んで「夢を咲かそう」という歌を共に歌います。これはきっと光ヶ丘特有な文化だと思います。

今年の1月に、私は寮を出ることになり、お世話になった寮母さんと寮の友達と別れて今のホストファミリーの家に行きました。お父さんは中国で働いているので、ホストシスターは今中国語を学んでいます。クラスが一緒なので、よく学校へ行く途中お互いに中国語や日本語の質問を聞きます。たまにするしりとりゲームも意外に楽しかったです。お母さんの料理はおいしすぎてホストファミリーの家に来てから、なんと4キロも太りました。中国に帰ったら、絶対お母さんの手作り料理を食べたくなるでしょう。ホストファミリーは最初から私を家族の一員として受け入れてくれました。この7か月を通してホストファミリーのやさしさを身にしみて感じて、本当にこの家の一員になれたようでした。

もうすぐ、お別れの時になります。初めて日本に来た時、一日がとても長く感じましたが、別れの日近づくと、逆に毎日とても早く過ぎていきます。去年出発する前に誰かが「一年間をかけて、後悔しないの?」と私に聞きました。今の私なら、はっきり答えると思います。「後悔していません。一年間をかけて、もっと広い世界を見て、そして中国文化を異国の方に伝えてあげました。私の留学生活は本当に充実したものでした。」

最後に、この11ヶ月、私は多くの人にお世話になりました。素敵な思い出をたくさんいただきました。皆さんには「感謝」の一言しかありません。ありがとうございました。そして、みんなに出会えて、本当に良かったです。

十分で十分

三重高等学校／南京外国語学校
梁　煜程
LIANG Yucheng

「新しい日本語」、初めてこの教科書と出会ったのは2018年の秋でした。今振り返ってみると、教科書を開いた瞬間が私の新しい生活の原点と言えるでしょう。

9月から、三重高等学校での一年間の留学生活が始まりました。学校の先生はとても熱心で、私のために四冊の教科書を用意してくださいました。日本の中学生が習っている国語の教科書です。その後、毎朝授業が始まる前の十分間から二十分間を使って、私は先生と一緒に教科書の音読をすることになりました。最初の頃、わずか十分間で何もできないだろうと思いました。この短い十分間がどれほど自分を成長させるか当時は考えたこともありませんでした。

最初に読んだ文章を今までも覚えています。ペンギンについての話でした。音読の一日目、私は非常に緊張して、息が切れるくらいうまく読めなかったです。それでも、先生は全然焦らず、一つ一つ言葉をチェックしてくださって、発音を教えてくださいました。家に帰ってから、電子辞書を引き、自ら単語を調べて、自信満々に先生の所に行く二日目、私はもっと辛かったです。イントネーションがおかしいと言われて、発音をきれいにするのに何日もかかりました。毎日十分間しかないので、結局南極大陸のペンギンと一週間付き合って暮らしました。苦しい思い出です。

このままでは、全部の四冊を完読するのはなかなか無理だろうと常に思って、その時すごく心配しました。でも、毎日少しずつ進むと、同じ言葉が何回も出て来ることに気づきました。再び出会うとき、その言葉と仲良くなって、昔の親友と出会うような気がし始めました。調べずにそれぞれの語句を読めるようになって、私もだんだんすらすら読めるようになりました。日本語の上達に連れて、私も教科書から世界各地の文化を学んで、物語を楽しむことができるようになりました。朝の十分間を短いと感じなくなって、充実した十分間になっていきました。

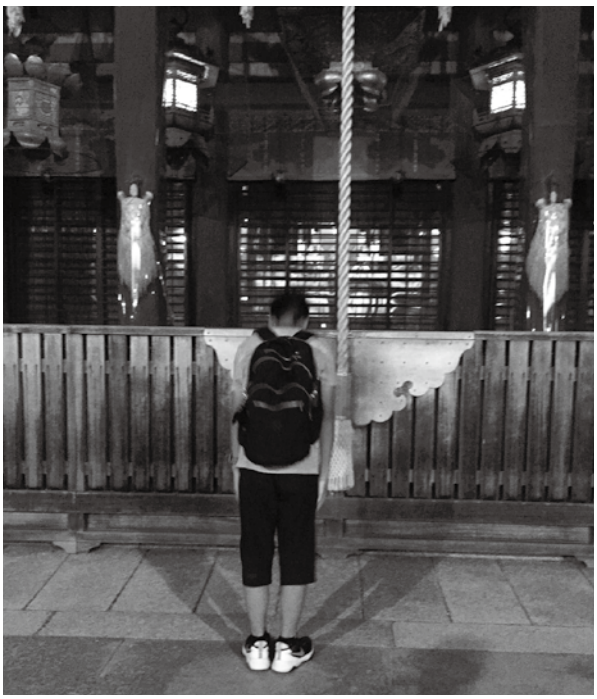
2019年の6月、私は第60回外国人による日本語弁論大会に出場しました。日本人特有の礼儀は日本人と自然との共生関係から生まれたことを題にして、自分の意見を発表しました。先生の指導のもとで、私は主催団体賞を受賞できました。その時、毎朝の十分間のおかげで、私がどれだけ成長してきたことを初めて実感できました。

他にも例をあげると、日本の高校では、朝の限られた時間もうまく使っています。ホームルームという朝礼では、その日一日のやるべきことを確認したり、実行委員がイベントの連絡をしたりします。そのほか、私の所属するバスケ部では、ベンチにいるときも頑張って練習します。みんな、極めて短い時間を上手に活用し、自分のステップアップに繋げています。

帰国まであと一ヶ月ぐらいです。これまで、やりたいことが多すぎて、なかなか帰るまで全部やりきれないと考えていました。長期休暇とか長い自由時間が欲しいと思っていました。しかし、これまでの経験は、まさに毎朝十分間の音読と同じなのではないでしょうか。貴重な思い出と経験として少しずつ貯まっていて、それはきっと私の人生の宝物になるでしょう。

「塵も積もれば山となる」ということわざのように、毎日の十分間で、私はずいぶん変わりました。成功の秘密は知恵と真剣な態度だけではありません。毎日少しずつ取り組めば、きっと期待している結果にたどり着けるでしょう。

十分で十分です。



一期一会

立命館宇治中学校・高等学校／河南省実験中学
周　子薦
ZHOU Zijian

スタートラインに立っていた瞬間、夢の中だけ見える生活が始まった。

日本に来る前の僕は、期待がいっぱいだが、どんな生活か全く分からなかった。何回も陸上やりたいと言ったけど、本当に陸上部に入るかどうか、全然考えたことなかった。なぜ僕は一年の留学生活の半分以上を陸上部にささげただろう。今でも意外に感じている。

あの雨の日のことは、まだ昨日のように覚えている。クラスに入った一周間後、雨だったが、一応陸上部の人に聞いて見ようの気持ちを持って、クラスにいる陸上部のＲＩＮＡに聞きに行った。「留学生の周ですけど」「はい」僕が声を出す瞬間、彼女は返事した。「ちょっと陸上部に入りたいのですが」「ウン、ほんなら、先生に聞いて見よう」こんなきっぱり返事された僕は「はい」と言った。そのまま先生のところに行った。そして、先生も「楽しんでやろうよ」と答えた。僕の陸上生活はこんな簡単なやりとりで始まった。

入部した後の３日、ずっと雨でした。最初の一周間のきつさと雨の影響で、正直諦めたかった。でも、唯一の中国人がこんな秒で諦めると思われないようにがんばって続けた。

こんな適当なスタートでいいのか？僕は躊躇した。でも、スタートラインに立っていたとき、僕は分かった。留学生活は 800 メートル走のようなものだ。躊躇の時間がない。二周、気づいたら、もう終わり。けど、頭の中で、次の一歩、膝はどこまであげるの？色んなものを考えたら何百年も過ごしたようだった。

毎日練習のおかげで、僕はどんどん走るのを好きになった。

冬休みのときも毎日練習を続けて、すごく楽しかった。一年生の三学期、三年生の先輩を送って、感動した。春休み、みんなと一緒に合宿行って、死にかけたけど、いっぱいの友達を作って楽しかった。二年生の新学期が始まって、一年生の後輩も入って、いろいろ教えてあげたし、いろいろ教えてもらった。６月、いっぱい試合に参加して、自分のベストタイムがどんどん伸びてきた。最後、京都インターハイで負けたけど、近畿インターハイも見学に行って、立宇治の選手を応援して、日本高校トップの選手達の勝負を見て、学んだことがいっぱい。

一瞬で僕の留学生活にある時間はあとわずかしかなくなった。速いけど、色んなことも終わってないし、友達と離れたくないし。でも、もうそろそろ帰らないと。

突然ですが、僕は京都大学を目指しているから、みんな、待っていてください。二年後また会おう。帰ったら、陸上やる時間が少なくなるかもしれないが、僕は走るのが好きだから、大学で新しいメンバーと一緒に走ろう！

日本、また…。

日本に来て感じたこと

大阪府立桜塚高等学校／洛陽外国語学校
黄　飛逸
HUANG Feiyi

初めて桜塚に来た日のことはよく目の前に浮かんできます。こんな時には「時間が早いな」と嘆くしかできません。日本での一年間の生活を通して、日本に対する見方もびっくりするくらい変わりました。

日本人は「冷たい気性の持ち主だ」という考え方が覆されました。「日本人は冷たいやなあ。家族にも迷惑をかけないよ」といった話をよく耳にします。私も深刻に考えずに事実として思い込みました。しかし、実際に日本人と生活したら、「冷たい」より、「人のために考える優しさ」と言った方が適切だと思います。普段、ご飯を食べた後、小学生の弟が自分の使った茶碗を台所に置いといただけで、ホストファミリーのお母さんが「ありがとう」と言ってくれます。「この子は、私のために考えて手伝ってくれたから、ありがとうと言いたい」と思っています。「家族こそ、友達こそ、親しいから迷惑をかけるじゃん。馴染んでない人に頼らないよ。」と言ってる人もいるでしょう。そう思ったら、その人は「家族より他人を大切にしている人だ」と判断してもいいじゃないでしょうかと思いました。ですから、家族の気持ちをよく考えて尊重して、家にもより調和がとれた雰囲気ができるでしょう。五月の時、私は初めて日本の体育祭に出ました。クラスを単位として、ダンスも自分で考えて、衣裳に至るまで自分で作るのは思いつきませんでした。中国でやった「個人戦」だらけの運動会とは違って集団的な競争ばっかりでした。それを通して、友達同士の間にある「絆」も強く感じました。真夏の時期で、情熱の炎と応援の叫び声で混ざっていた青春の活力も味わっていました。

小学校の頃に、ある左利きが、黒板に問題を解いて、左手で書こうとしたら、先生に「右手で書いて」と注意されたことがありました。「左利きがかっこよくない？なんで注意されるの？」とずっと先生のやり方が理解できませんでした。高校に入っても、クラスには左手で字を書く人は一人もいませんでした。しかし、桜塚には、うちのクラスにだけで左利きが何人もいて、「多数派ではなくてもちゃんと受け入れられたじゃないか」と思いました。

日本の一部の学校には、制服は自分で決める制度が採用されています。人も「女はスカート、男はズボン」と縛り付けられた枠から解放されました。本当に集団活動を基本とした上で、人々が「個性」としての違いと多様性を保って自由と包容力を備えたところだなぁとすごく思いました。

留学によって広がった世界が見えました。この一年間で色々なことを体験して本当に楽しかったです。みんなで一緒に作った思い出を一生の宝物として大切にします。

大阪、キラキラの思い出

大阪府立三島高等学校／南京外国語学校
李　心怡
LI Xinyi

私が大阪に住むのが、今日までもう第278日です。家以外のところでこんな長い時間を過ごすのがほかにありません。留学生活はもうこんなに経ったんだと、帰るまであと1カ月のいまでも時々不思議な感じがします。

そういえば、私の留学生活もたしかに残りわずか1カ月です。時間の流れが実に早いと思うが、この10カ月を振り返ってみると、自分が本当に成長できたと感じました。

感想を書くと言われたら、やはり最初に思いついたのは、私の10カ月間の部活動についてです。完全に初心者である私は、バドミントン部に入りました。正直始めたばかりの頃は、そんなに部活に行きたくなかったです。めっちゃしんどかったし、運動部だから厳しいし、ちょっと辛かったです。途中足は何回も捻挫したし、それでも先生に部活に来て上半身のトレーニングだけしてねって言われた時、理解できませんでした。でもこのままでやめるのが逃げる同然じゃないと思っていたから、辛かっても部活を続けました。ちょうどその時、当時はまだ一年生の今の部長の足もひどく怪我してしまいました。それでも、毎日ちゃんと部活に来て、壁打ちしたり、素振りしたり、チーム分けしたり、マネージャーみたいな役割を果たしていました。彼女の姿を見ると私は急にわかってきました。部活は個人の娯楽みたいなものではなく、みんなで一緒に頑張らなければなりません。初心者のが私が入った時も、みんなから色々助けてもらったのです。辛い時もあるかもしれないが、そういう時は自分のことばかり考えずにそれを乗り越えようとする意識が、部活で得た貴重なものです。

ですから、三月の私は最後まで部活頑張ろうと決意しました。思いがけないことに、あしたは、もう最後の部活になります。引退することを思い出すと、なんとちょっと寂しい感じがします。普段はしんどいしんどいと言いながらも、クラブで素敵な人たちといっぱい出会い、貴重な思い出もたくさん残りました。バド部に入ってよかったと思います。

日本に、大阪に来て、前と全く違う環境を体験でき、新しい生き方に触れられました。美術部の作品、ジャズ部のダンス、吹奏楽部の合奏に触れるたびに、みんなのその誰かに勝つためではなく、単純に好きなことへの情熱に、私はすごく感動しました。体育祭なども、今までなかったほどの盛り上げた雰囲気を楽しめました。みんなの笑顔を見ると、頭の中に青春という言葉がついに思い出しちゃいます。高校生活ってこんなのもあるんや、青春ってこういうものかねとよく感じられて、自分ももっと可能性を持っているじゃないかなと考えました。今は前より勇気を出して、やりたいことを挑戦できるようになったような気がします。

何より、大阪のみんなのおかげで、この一年間はちょっと困難があった時でも、ずっと楽しかったです。みんなと一緒に過ごした時間は、最高に楽しかったです。まだみんなと一緒に体験したいことがいっぱいありますが、人生とは出会いと別れの繰り返しです。この一年間のキラキラの思い出を一生の宝物としてずっと覚えてといて、これからも頑張っていきます。日本に来て、みんなと出会えることは至って幸せです。またいつか会えると信じています。みんな、本当にありがとう。大阪がずっと大好きです。

僕の一年間

清風南海中学校・高等学校／東北育才外国語学校
孫　逸馳
SUN Yichi

11か月間の留学はもうすぐ終わる。ほぼ一年間の留学生活は、僕にとっては収穫をする一年間だ。最初の不安から今の人とも環境ともの馴染みまで、僕は留学しなければ見えないものを見つけた。いうならば、この一年間は発見と成長の一年間だ。

発見編

異文化交流は発見の過程だと思う。留学の一年間で、僕は日本を見つめて、一年前の僕が見えない世界を見た。一番多いのはもちろん学校だ。学校の中で見て驚いたものがいっぱいあった。清風南海にある特別な活動、毎日の心経、クラブ…確かに最初見たときは結構ショックだったけど、僕が初めて心の中から“あ！これが本当の日本人か！”と思ったのはやっぱりグローバル活動とテスト前の時。ホームステイのおかげで僕は確実に日本人の真面目と大変さを見た。テスト前毎日3-4時に起きることも、グローバル活動の発表のために12時までも準備していることも。正直僕は最初日本の勉強がめっちゃ楽だと思っていた、でも実際に自分でやった後、このつらさもわかった。そして、勉強だけじゃなく、一緒にクラブを参加する友達も、みんなうまくなるために一生懸命にがんばっている。こういうみんなを見て、僕も頑張らなきゃいけないと思った。これから僕も海外のどこかにいっしょに頑張ってる人がいることを心の中に肝に銘じて、頑張っていく。

自分以外のことを発見すると同時に、自分自身にも新しい発見があって、今まで気づいてないことを初めて気づいた。「死ぬほど頑張ったら、やってることも面白くなれる」と、部活の先輩が引退するときそう言ってくれた。ずっとわかってるはずのことだけど、その時初めてかみしめた。確かに頑張って日本語を勉強したら交流するときも楽しくなれる、よく単語を覚えたらテストの時も楽しくなれる。いくらどんなに好きなことでも、努力しなく適当にすればすぐ飽きるになるだろう、けど、頑張って目標を達成して、そう繰り返したら前よりもっともっと楽しくなれる。

成長編

日本にいる一年間で、僕はいろいろな中国と違う方面も成長した。

能力の成長はもちろん、部活に参加した球技の成長、日本語の上達、知識の勉強…能力以外、僕が一番気づいてよかったと感じたのは心の成長だ。周知の通り、日本人はおもてなしで世界中に有名になっている、その原因はなんだろう、そしてなんで中国人はできないの？僕はその原因が日本人特有な他人への思いやりだと思う。留学生として、完全に新しいところに行って、不安と緊張は避けられないものだ。でも他の人に思いやられたら、環境に慣れやすくなれる。「EQ（心の知能指数）が高い人は他の人の立場で考えられる人だ」、ぼくはそう言われたことがある。すなわち、ほかの人を思いやれる人じゃないか？日本に来た後僕はとても思いやりの重要性を感じた。自分もこれから他の人を思いやっていこうとした。

ここまで、一年間の考えと収穫のまとめはほぼ書き終わった、でもあと一つ書きたいことがある、それが「一期一会」の気持ちだ。僕は心連心活動に参加した一年間「一期一会」の気持ちを深く感じた。一年だけ一緒に生活できるホストファミリーと学校の友達、三回しか会えない13期生の友達と先生、そして、人生の中一度しかないこの一年間。この一切も「一期一会」の気持ちだ。この後の人生に、僕はこの一年間に経験したことも、友達の名前と顔も忘れるかもしれないけど、この一年間から収穫した成長と考えは絶対宝物としてずっと覚える。だって人生というものはそうじゃないか？みんなの人生が出会ってお互いに貴重な思い出を残して続いて進んでいく。

さあ、新しい出会いを探しに行こう！

いつかすべてが君の力になる

和歌山県立那賀高等学校／広州外国語学校
趙　芸萱
ZHAO Yunxuan

一年前、私はどきどきしながら、留学先の資料をもらった。そのとき、「和歌山」と言うところは聞いたことがなかった。でも今振り返れば、ここで過ごした一年間は、すでに大切な宝物になっていた。

己を超える

「絶対無理！」

マラソン大会に参加すると知った時、そう思った。体育はずっと苦手だ。他の科目なら頑張ればできる自信はあるけど、運動が不得意でしんどくて、どうしても嫌いだった。高校入試のため、必死に鍛えた時もあったが、あの時だって三キロが限界だった。今鍛錬不足の私からみれば、五キロもあるマラソン大会は、どう思っても不可能だった。

そんな不安の気分で、いよいよ本番がやってきた。「もう無理だ。ここまでにしよう。」途中で、私は何度もそう思った。

でもその時、応援してくれる先生がいてた。一緒に走って、お互いに励ましてくれる仲間がいてた。グラウンドに戻り、最後の一周で、さまざまの人から応援の声が聞こえた。お世話になってた先生、クラスメート、クラブの先輩、等々。温かい応援に包まれながら、私はゴールに到着した。

私にとって、長距離走は心の弱点と言っても過言ではない。だが、マラソン大会を完走した時、どんな困難でも立ち向かえる、そんな気がしてた。

色んな出会い

那賀高校で、中国語の授業に出るチャンスを得た。外国人に中国語を教えるのは珍しい体験だった。私は主にスピーキングの指導をしてた。大きな声で模範しなきゃいけないので、授業が終わると、声も嗄れた。でも先輩たちの「ありがとう」を思い出すと、達成感が湧き出る。

オーストラリアからの留学生も那賀高校にいてた。よく一緒に発表会に出ることで、留学生同士が友達になった。彼らとの交流で、まだ新しい発見ができた。たとえば、オーストラリアでは、授業の間に休憩時間がないらしい。言語の力が異なる国の人を日本で繋がり、私はそのことで心から感動した。中国にいた時、英語は主に試験のため勉強してきた。でも今は「いろんな言語でいろんな人と交流できるなんて、どんな素敵なことだろう」と、初めて深く感じた。

予想外の収穫

この一年間で、一番の収穫といえば、それは琴部に違いない。

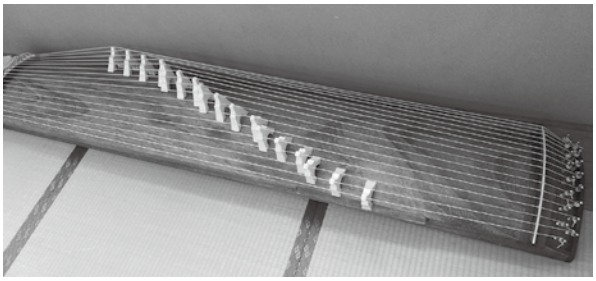
中国琴を八年間やってきた。最高のレベルを取った後、プロとの距離を認識し、また勉強の任務も重くなり、琴の趣きがなくなっていて、諦めた。那賀高校で琴部があると知った時、入るつもりもなかった。琴部に申し込んだのは、日本へ来て三ヶ月経ってからだ。

中国で琴を精通したと言っても、日本琴なら楽勝とは言えない。一番苦しかったのは正座だった。練習の後、自転車もこがないほど足が痛かった。まだ日本琴を演奏する時，左手は爪を使わない。毎日指が直接に弦に磨かれ、出た水ぶくれが全然治れなかった。相似だが微妙に違う弾き方、仲間たちとの協力等、色々な課題に向かって苦労してきた。

しかし、先輩と先生が優しく導いてくれた。中国にいた頃、ほとんど「独奏」してきたが、琴部で仲間ができて、皆がひとつの目標に向かって一緒に努力して、改めて琴の楽しさを感じた。

中国と日本の文化は古代から繋がっていた。その繋がりも琴で表われ、私を魅了していた。もし中国で琴を弾いてなかったら、この出会いもなくなるんだろう。

自転車、セーラー服、家の猫…一年前の私にとって、すべては遠かったが、今はすでに馴染んでいた。英語も琴も、私の十七年の人生がこの一年に、新たなこととぶつかり、新たな収穫が出てきた。「いつか全てが君の力になる。」私もこの一年間が大切な、替えのない力に成ると、信じている。



美しいプレゼント…日本での 11 ヶ月

活水高等学校／黄岡市外国語学校
陳　子萱
CHEN Zixuan

2018 年 9 月、あの日、この憧れの国で留学生活が始まりました。

日本にきたばかりの時、何を見ても新鮮と思っていました。以前中国にいた時は、アニメでしか日本を知っていなかった。ここに着いてみて、本当に私が思っていたのとはずいぶん違うことに気づきました。私の生活地は長崎県で、あまり大きな町ではありません、でも、丁度いいと思っています。風景も美しくて、人も優しい。そして、海も見ることできます（故郷であまり見たことがありません）。私は本当にこの町が大好きです！

嬉しい寮生活

最初、寮に住むことを知った時、ちょっと失望しました。私はとても日本人の家族と一緒に生活をしたかったです。しかし、寮の舎監たちがみんなとても優しい人。私に色々教えてくれたり、長崎の面白いことについておすすめしてくれたり、私をとても助けてくれました。

寮で、色々なパーティーも参加しました。例えばハロウィンパーティーとか、クリスマスパーティーとか、美味しい料理をたくさん食べました。そして寮のみんなとクリスマスプレゼントを交換しました。本当に楽しかったです。休みの日、寮の傍に散歩することも面白かったです（猫ちゃんがいっぱいいますから、私は猫が大好きです）。

短いホームステイ生活

今年の一月と四月に、私は素敵なホストファミリーと、雲仙で楽しい 2 週間を過ごしました。とてもいい思い出ができました。ホストファミリーのお父さんとお母さんは本当にいい人です。ずっとずっと私のことを考えて、仕事が忙しい時でも時間を作って一緒に遊びました。日本のお正月も体験しました。家族のみんな一緒におせち料理を食べて、そして餅つきをしました。初めての餅作り、美味しかったです。そして島原と諫早にいき、温泉を体験しましたよ。温泉玉子も美味しかったです。雲仙地獄も行きました。どこも高温のため、白い煙が立ち上がり、おもしろいと思って見ていました。

楽しい学校生活

日本の高校と中国の高校がたくさん違うことがあります。こちらの高校は午後 4 時ぐらい授業が終わりますから、時間がいっぱいありますね。

きたばかりのとき、ちょうど高校の運動会でした。高校一年生のみんなが浴衣を着て、踊りました。初めてだから、いい思い出できましたね。運動会は、クラスのみんなが一生懸命のおかけで、第二位のいい成績を取りました。その後もたくさんの行事がありました、例えば歓迎遠足とか球技大会とか、とても楽しい思い出です。

部活動

私は今美術部に所属しています。同じ趣味の友達と一週間二回好きな絵を描きます。残念なのは、私がきたばかりの時はもう文化祭は終わっていましたので、一年間美術部一番忙しい時間に参加できませんでした。

以上はこの 11 ヶ月が私の日本生活です。日本に来ることができて、本当によかったです。

忘れられない壱岐生活

長崎県立壱岐高等学校／長春日章学園高中
張　晨陽
ZHANG Chenyang

日本で一年間の生活は瞬く間に終わりました、自分も感じられないで一年過ごした、この一年中に、日本語の勉強だけではなく、様々な人や事などあった。私の人生はここから大きく変わって行った。今からどんどん説明します。

どうして日本に来るか、日本の高校生活を体験するか、もともとの理由は、幼い頃、アニメとか小説とか、日本についてのこと知りたくて、そんな事は中国では体験することができないですから、やはり自分自身で日本に来て見るほうがいいだと思いますので、中学校を卒業したら高校で日本語を勉強し、日中交流センターのプログラムに参加し、今年日本の長崎県壱岐島に来ました。

壱岐は特別な所だと思うんだ、日本大陸と分けた自然的な島で、昔から、日本と東アジアの貿易の拠点として有名になった、千年以上の歴史文明が存在する「歴史の島」と呼ばれます。

最初に私は湯の本にある旅館に下宿生として来た。この旅館は二百年の歴史を持っています、とても古い存在だと思います、そしてここには私だけではなく、ほかの離島留学生と一緒に住んでいます。旅館のお爺さんとおばあちゃんはすごく優しい人だと思う、生活の方はいっぱい助けくれました、毎日作るお弁当もとてもおいしいです。温泉旅館ですから、毎日温泉に入れるのはとても幸せだと思います。

初めて新しい所に来た、スーパーやバス停とか、場所よくわからないです、最初にどこへも行かならば本当に大変なことだと思います、よかったのは一緒に住んでいる優しい先輩と同級生たちが案内してくれて、彼達と一緒に島で遊びとか、買い物とか、一ヶ月ぐらいこっちの生活が大体慣れました。彼達といっぱい素晴らしい思い出を作りました。半年ぐらい終わったら、私は新しい下宿先へ引っ越しました。学校の近くで、毎日通学はとても便利になりました。こちらのお父さんとお母さんもとても親切な人だと思います、みんなと一緒にご飯を食べたり、私を連れて一緒に遊んだり、いつも私の事を気にして、ずっと私の後ろで応援して本当にありがとうございました。ここは家みたいで、とても安心感が持っています。

一年生時、東アジア歴史中国語コースに入りました、皆は普通な授業も受けるし、毎日は中国語授業と東アジア歴史授業も受けます、皆は中国の事をとても知りたいので、いつもみんなと中国の学校や社会の面白い事を紹介して、毎日学校の時間を楽しみです。クラスの担任松田先生は厳しいですけど、私の学校の事や生活の事など、ある時、諦めたい時、いつも私に「頑張って続いて」との言葉を励ます、副担任の中国語の山口先生もすごくいいな先生だと思う、ペラペラで中国語を話せます。コースに入って本当に最高だ。友達も先生たちもみんな大好きです！

部活動は三つに入りました、それぞれは放送部、茶道部と調理部です、放送部にはめちゃすごい人ばかりです、みんなは大会を参加するため、毎日いつも四時間ぐらい練習します。秋の時私も一回で佐世保市にスピーチコンテストを参加した、夜明けの時、顧問の先生はみんなを連れて、海辺で発音練習する、朝五時の佐世保を見て、心には色んな気持ちが入ります、本当にいい思い出を作りました。調理部にはアメリカからのT君と男子二人だけでボーイズクーキングをする、時々女子部員から料理の作り方を学びます、お菓子や美味しい色んな風の料理を作って、毎回やった時はめっちゃ楽しかったです。調理部には大体全員女子の状況に対して茶道部は全然逆です、茶道部には女子が三人だけ、時々作法室から私達男子生徒から大きく喋る声と元顧問の先生の「私語喋るな！」の声が聞こえます。茶道部には日本のお茶文化を勉強だけではなく、先生と友の交流も大事だと思います。

壱岐島で過ごした一年間で強くて感じたことは、世界には色んな生き方や考え方を持っている人が住んでいる。自分の周りの人と付き合いだけではなく、そんなに非常に大きい世界で、国籍が違っても、性別が違っても、いろんな人との出会いが大事だと思います！自分の選ぶことを後悔しないで、壱岐島であった事を忘れず、続けて頑張ります。この一年で、壱岐島のみんなといっぱい懐かしい思い出を作りました。

最後に、海を向こうへ、大きい声で言いたい。愛してる壱岐高、ずっと応援してる壱岐島！！

絆

岩田中学校・高等学校／岑鞏中学
胡　澤兵
HU Zebing

今日も雨でした。あの日と同じでした。私がここに来たあの日。

飛行機を降りたばかり、また一時間の高速バスを乗っていよいよ私の目的地に来てしまいました。大分？最初この地名を見たとき、すぐ「どこ？」と思いました。この頭の中で全く認識がない町で、これから一年間過ごすことを思い出すと、この気持ちが何というか、不安？いええ、むしろそれが全然なくて、やっと親の温室から逃げ出したあの時の私の胸に熱血しかありませんでした。

小雨に降られて、私はクラスの担任先生と一緒に樟英寮に到着しました。優しい寮母さんと先生たち、友好そうなクラスメイトたち、後は一人の中国人の先輩、これらの物事は、私をこれからの留学生活には絶対光しかないでしょうと信じさせてしまいました。あれから三カ月、私も無事に過ごしました。学園祭、ディベート大会、日本語能力試験、色々な活動で毎日を充実に過ごしました。そして、自分がアニメと仮面ライダーが好きのかけて同じ趣味を持つ友も作りました。こんな生活の中で私に不快を感じらせるのは、ただ毎日ある自分が苦手な英語のテストしかないかな。（苦笑）

その後，私が日本での初めのホームステイとお正月を迎えました。寮生活と全く違って新鮮な生活でした。色々な優しい方と出会って、学校では全然できないことも体験してさまざまな経験を身につけてしまいました。正直、私は初めてこの見知らぬ町で家族と家庭のぬくもりを感じました。初めてというとあそこでは私がさまざまな最初を体験しました。初めてのサイクリング、初めての海釣り、初めての温泉旅行…。ですが楽しい時間が過ぎるのはいつも速い、私はまた一人になってしまった。

私は迷いました。私はそれが正解だと思うことをやっています、ですが、他の人と違って、私はまるで異類でした。すべては最初と同じみたいですが、なんか違うことを感じました。しばらくの間私は敏感になりました。毎日遠慮して慎重に過ごしいました。他人と話したくなくなってしまいました。コンフォートゾーンに逃げてしまった私は空しく歳月を過ごしてしまいました。そのまま一体いくら過ごしたのか知らないですが、あの時の私は初めてあんなに寂しく感じました。

「変わろう！話しかけよう！」心が強く私に呼びかけていました。しかし、私は結局また逃げてしまいました。透明の壁が私を取り囲みました。壁にひびがはいったのはあの日でした。あの日空が青くて風も優しいでした。合同体育の関係で全校生徒が校舎の外で集まっていました。私は一人で木の下に立ってぼうっとしてた、「一人で楽しくないでしょう、一緒に遊ぼう？」彼女がこうやっていいながら、私を彼女達のグループに引き込ませました。笑う彼女はまるで天使でした。これで私もちょっと勇気を出しました。また他人に話しかけられるようになりました。もちろん、すべては順調に進むことでもない、でも私はもうそんな意地悪なことを気にしません、ついに、透明な壁もいつの間に消えてしまいました。

大雨が止んでいて空気もきれいになっていた気がします。窓から飛んでいた鴉は大空に向かっていきました。周りの楽しそうな笑い声が耳に入って、ついに自分も笑ってしまいました。今の私はようやく分かりました。この旅で様々な絆を作った私は寂しくないです。色々お世話になった皆様、ありがとうございました。優しくしてくれたあなた、ありがとうございました。

Don’t wait.
The time will never be just right.
― Napoleon Hill

私の宝物―日本での11ヶ月

熊本県立宇土中学校・高等学校／福州外国語学校
林　煜菲
LIN Yufei

2018年9月に、私の11ヶ月の留学生活が始まりました。

来たばかりの時、いろいろ不安でした。どうやって話しかければいいか、何についてしゃべればいいか分からなくて、悩んでいましたが、友達とホストファミリーのみんながいろいろ教えてくれたり、熊本のことについて紹介してくれたりして、だんだん私は積極的にみんなと喋れるようになりました。今まで、毎日充実した日々を送ってきました。

ホストファミリーとの思い出

私の生活地は熊本県で、風景が美しくて、休日にときどき海を見に行きます。熊本に馬刺しやいきなり団子とかさまざまな美味しい料理もあります。また、ホストファミリーから熊本に「太平燕」と言う料理もあると聞きました。私の故郷にも同じ名前の料理がありますから、ちょっとびっくりしました。その後、みんなで食べに行きました。故郷で食べたのとちょっと違いますが、野菜がたっぷりで、見た目もいいし、味も美味しかったです。

ホストファミリーのみんながとても優しくて、みんなに中国のことについて話したり、日本との違いを交流したりして、嬉しかったです。ときどき、私は日本語でどうやって話せばいいか分からない時があります。それでも、みんながとても真面目に耳を傾けたり、単語を教えてくれたりしました。そして、私もだんだんみんなとの交流を楽しむようになりました。

この11ヶ月、私はホストファミリーのみんなとたくさんたのしい思い出を作りました。鹿児島や阿蘇山に行ったり、妹と着物を着たり、お正月に餅つきをしたりしました。それらの色々な経験が私にとって、宝物のような大切なことだと思います。

学校生活

学校ではたくさんの行事がありました。その中で、強歩会で30km歩くことや体育祭で組み体操など今まで全然やったことないこともありました。最初は「私できるかな」と思いましたが、最後まで頑張ってやり遂げたときの達成感は今でも心の中に残っています。自分に挑戦するのは大事なことだと分かりました。

学校でSSHというプログラムがあり、十一月に学校のSSコースのみんなで関東研修に行きました。筑波大学や研究所に行って、最先端技術の紹介を聞いて、機械を見て、勉強になりました。最後はグループのみんなと一緒に発表しました。視野を広げ、様々な領域のことについて学習し、とても楽しい経験でした。

部活動

私は美術部に所属します。たくさんの同じ趣味の友達ができて、毎日喋りながら絵を描いて、楽しい日々を過ごしました。みんなが私を外国人と思わないで、本当の友達のように付き合って、私の心を温めてくれました。みんなでお花見に行く時のことは一番印象に残っています。「桜の花びらを地面に落ちる前に掴むと幸せになる」という話があって、食事の後、みんなで桜の花びらを捕まえました。みんなの笑い声の中で遊ぶのは私にとってとても幸せな瞬間だと思います。

今振り返ると、この一年間は本当にあっという間でした。中国と全然違う国に来て、違う環境に来て、やったことないことを挑戦したり、視野を広げたりしました。この留学生活の間にできた思い出や積み重ねた経験は全部私の大切な宝物として、きっと、ずっと私の心の中に残ると思います。

熊本、日本、故郷

熊本県立第一高等学校／東北育才外国語学校
梁　軒振
LIANG Xuanzhen

去年の9月、中国各地から来た26人は東京に集まりました。短い5日の研修をし、それぞれの場所に行って約1年間の異国生活が始まりました。26人中の一人として、僕は色々な心配、不安、憧れとともなって、この国に来ました。

熊本との初めての出会いは大雨の中でした。僕はそれまで、蒸し暑くじめじめする気候が大嫌いでしたが、大雨の中の熊本はとてもきれいでした。雨の後のきれいな道、茂っていた草木を見て、大雨が好きになり、熊本が好きになりました。

9月11日、最初の登校日になりました。まず、先生たちの前で自己紹介をして、クラスメイトの前で自己紹介をしました。先生が第一高校を案内してくださって、授業が始まりました。実は、第一に来る前に「どうすれば皆と仲良くなれるかなぁ～」や「授業とか時間割りが分からなかったらどうすればいいでしょうか～」などのいろいろなことを心配しました。最初は、やはり授業の内容や時間割りなどのさまざまなことが全然分からなくて、皆の考え方とは多少一致しない所がありましたが、周りの皆んなはとても優しくて熱心でした。毎日の時間割りを教えてくれて、応援と挨拶のlineメッセージもいっぱいもらいました。特に、初めて会ったクラスの男子7人と一緒にカラオケに行って、皆にそれぞれの名前の中国語の発音を教えてあげたのは今までも鮮明に覚えています！皆の助けのおかげで僕の日本語が日に日に上達してきて、日本の高校生活にもだんだん慣れていきました。

僕の出身の東北育才外国語学校と違って、第一高校はひたすら勉強するより「文武両道」とか「団結」などを求めていると思います。一番「団結」の気持ちを感じた場面は体育祭でした。その一つはパネルです。一人でも間違うと汚くなってしまうので、一人一人の協力が不可欠です。練習の時に、眠くなってしまったり、間違ったりする時もあったけれども、リーダの先輩たちが毎日皆より早く来て遅くまで、大きい声を出して練習に取り組む姿を見て、自分も先輩たちに負けたくない気持ちを抱いて毎日真剣に練習して、だんだん上達していきました。二つ目は組体操です。組体操は体育の授業で習いましたが私にとってはとても難しかったです。専門の言葉が分からなかったし、順番が覚えづらかったし、筋力も足りませんでした。でも、私と同じグループだったクラスメイトたちは辛抱つよく教えてくれたり、アドバイスをくれたりしたおかげで、僕がだんだん皆に追いついて、できるようになりました。

ここまでもういろいろと書きましたが、この一年間の日本生活で、一番思い出に残ったのは部活です。第一高校に来て一ヶ月ぐらいの時、友達から誘われてバドミントン部の見学に行きました。見学の時、バドミントン部の様子を見て「すごいなぁ～」と思いました。また、おじさんが中国の広州で働いているというマネージャーの先輩に話しかけられて、部活の皆も挨拶しに来て、みんな優しいという印象が心に残りました。最初の頃は本当にきつかったです。体力が足りないので筋トレの時に体調が悪くなる時が多くなり、先生は僕の様子を見て「最後までしなくてもいい。」とよく言いましたが、他の人のきつくなっても毎日一生懸命頑張っている様子を見て、友達からの「けんちゃんならできるよ！」や「あいつに負けんなぁ！」など応援の声をもらって、毎日の練習で頑張って、体力も技術も両方向上しました。最初いつも5点以下で皆に負けた僕も試合に出れるようになりました。僕も絶対に先輩たちのように最後まで頑張ってこれから行われる人生初のバドミントンの試合で勝ちたいと思います！

今の僕には、帰りたくない気持ちしか持っていません。なぜなら、この1年間の生活を振り返ってみると、皆は今の僕にとっては「友達」というより「家族」だと、日本は「外国」というより「故郷」だと思っています。皆がいるからこそ、この1年間の日本生活は面白く、充実し、思い出になりました。これから、帰っても必ず一生懸命頑張って、またこの国、僕の故郷にこれるように努力します！

日本のみんな、熊本の全て、またね！！

忘れられない一年

日章学園高等学校／吉林省和龍市高級中学
金　星国
JIN Xingguo

2018年9月、私は宮崎の日章学園にやってきました。最初はやっぱりいろいろ不安でした。宮崎に着いて、寮に向かう時、車内で先生といろんな話をしましたが、意味がわからなくて大変でした。寮に着いて、案内された部屋に入り、次の一年間中国に帰れないんだと思うと、涙が出てきました。寮の周辺は全部畑で、夜になると外は真っ暗になるし、最初は大変でした。

初めての登校日はちょうど体育祭でした。いろいろ経験しましたが、やっぱり最初だったからみんなと交流するのが難しかったです。そしてその次の日、香港と台湾からの留学生二人が私の部屋に来て、いろんな話をして、学校のルールとかいろいろ教えてくれました。幸せだなあ思いました。

日本の生活に慣れるまで結構大変でしたが、一ヶ月経ってどんどん慣れてきました。中国に帰りたかった気持ちもだんだん変わってきました。クラスメイトや寮生たちとも仲良くなりました。学校でもいろんな行事に参加しました。10月の文化祭とかクラスマッチでいろんな人たちと友達になったし、調理科の先輩たちが作った食べ物もいっぱい食べたし、楽しかったです。そして、ずっと日本人たちと交流したおかげで、日本語もどんどん上手くなってきました。最初自己紹介をした時、とても緊張して、何も言えなかった気がします。今はいろいろ経験などをして、勇気もわいてきて、緊張もしていないし、普通にみんなと冗談が言えるようになりました。

2019年に入って、今までよりもっと頑張ろうと思いました。お正月の時は、日本人の家でホームステイをしました。初めてのホームステイでしたが、私を受け入れてくれたホストファミリーは凄く優しい方でした。分からない時は、いろいろ教えてくれたり、日本の文化についてもいろいろ話してくれたりして、いい思い出になりました。一緒に海にも行ったり、イオンにも行ったり、楽しかったです。

4月27日は、遠足がありました。日本の遠足は中国とやっぱり違いました。みんなと一緒に行くのではなくて、現地集合でした。遠足の時、後輩たちもできたし、みんなとドッチボールとかサッカー試合をしました。暑すぎで日焼けとかしましたが、日本での初めての遠足は楽しかったです。

学校の部活では、私は最初バレー部に入りました。三ヶ月ぐらい頑張って、その後はやめましたが、いろいろ経験しました。初めてだったから最初難しかったです。でもみんなちゃんと教えてくれて、どんどん上手くなっていきました。いろいろな大会もあったり遠征もあったり、大変でした。でも毎日頑張ってきたからよかったと思います。

日本に来てもう十ヶ月経ちました。日本語を読む、聞くのはもちろん、流暢に話せるようになってやっぱり嬉しいです。たまに分からないところがあっても、みんなが教えてくれるから、どんどん上手になってきました。
毎日みんなと一緒に学校生活をしていくうちに、もう[俺は留学生だ]ということを忘れてしまいました。この一年間でいろんなこともあって、それらのことが私を大きく成長させてくれました。忘れられないこともいっぱいあり、日本が大好きになりました。別れるのは凄く悲しいです。もう帰りたくないのに、でもいつかまた会えると思います。

みんなと会いたいから。

日章のみなさん、またね…！

心を開く、心を繋ぐ

鹿児島県立武岡台高等学校／天津外国語大学附属外国語学校
鄭　天祺
ZHENG Tianqi

六月に入り、留学生活の十か月目、帰国の準備でだんだん忙しくなってきた私は鹿児島で人生「初めて」の梅雨を迎えました。

傘を開きながら、その時思ったのは、人生「初めて」の梅雨は鹿児島で過ごした留学生活の中の何回目の「初めて」なのでしょう。

自分でさえ答えられません。

初めて活火山を見たり、初めて茶道をしたり、初めて修学旅行に行ったり、ホストファミリーと一緒に人生初めての竹の子掘りを体験したり…

輝いている星の様に、数が多くて数えられない「初めて」の中で、私の心を打った事もいっぱいあります。

友達が、今年の三月の誕生日の時に、私に「家に帰ってから見てね」と紙袋を渡してくれました。

家に帰るまで待てなくて、バスの中でその袋を開けてみたら、中に入っているのは手作りのアルバムでした。面白い絵や写真がいっぱい貼ってあり、最後に中国語でお祝いの言葉が書いてありました。

今までの思い出が浮かんできて、心が温まり、知らないうちに涙が私の頬を濡らしていました。

この前も、茶道の道具を中国に持って帰りたいと思い、同じ茶道部の友達に茶筅などの販売店を尋ねました。

思っても見なかった事に、翌日に友達は私に新しく素敵な茶筅を持って来てくれて、「家にあったから、是非ていちゃん日本の記念にね！文化祭も頑張ろうね！」と言ってくれました。

そこまで私のことを思ってくれたのがすごく意外で、私はその優しさに更に感動してしまいました。

三年生になり、志望校を決める時に「中国語を学びたい」と言ってくれた人もいました。

最近、よく友達から、「もうていちゃんを中国に帰らせない」とか、「帰ったら私たちのことを忘れちゃダメだよ」とかの言葉をかけられ、思い出す度に幸せを感じています。

これはお互いへの愛情や信頼であり、友情というものであり、心の繋がりから生み出された貴重な絆だと私は思っております。

この全ては、「心を開いた」からこそできたのだと思います。

「心を開く」ということを私に教えてくれたのは、私を受け入れて、誠心誠意に接してくれた私の日本での家族です。

この一年間、私はホストファミリーに預けられたのではなく、ホストファミリーに我が子のように育てられたと思っています。

松木場ファミリーは、少しの私心もなく、隠し事もなく、何でも教えてくれて、色々な体験を私にさせてくれました。

最初なかなか日本での生活に馴染めなかった私に対しても心を閉じることなく、ずっと私が心を開くのを待ってくれました。

自分から「心を開く」事によって、出会いを絆にすることができます。

それによって、赤の他人は家族や友人になり、他郷は故郷になります。世界はこの心の繋がりで広がっていきます。

これは私が今回の留学を通して学んだことであって、私のカラフルな十七歳の青春で、私の未来を築いてくれるものです。

日中交流センターの先生方、鹿児島のみんな、一年間ありがとうございました！

ヤカゼ

神村学園高等部／太原市外国語学校
王　鈺瑄
WANG Yuxuan

東京の研修が終わった後、雨が降る鹿児島に着きました。周りは日本語だらけの環境で、日本の留学生活が始まったなと感じました。2018年9月8日、留学生活が始まりました。

ホストファミリーのお母さんと初めて会った時、お母さんは笑顔で私の荷物を受け取って、いっぱい話しかけてくれました。今でもその時、車の中で話すお母さんの日本語が聞き取れなかったことを覚えています。私の緊張した気持ちに気づいたお母さんは「大丈夫だよ！みんなも最初はこうだったんだよ！だんだん上手になるから、心配しないでね！ママといっぱいしゃべってね！」と言ってくれました。「よかった！」と思って、だんだん落ち着きました。いつも「さすがせんちゃん」と言ってくれるお父さん、一緒に花札で遊んでくれるおばあちゃん、冗談が好きでおもしろいお兄ちゃんたち、明るくてきれいなお姉ちゃん、この11ヶ月間の留学生活で沼田家と生活できたのは本当に幸せだと思います。ホストファミリーと色々な思い出も作りました。一緒に大分の遊園地で遊んだり、熊本へ苺狩りに行ったり、鹿児島のバラ園に行ってバラを見たりして、すごく楽しかったです。

それだけでなく、ホストファミリーのおかげで、私の性格もとても変わりました。10月に文化発表会で中国のことについて発表しました。外国人の前での初めての経験で、すごく不安でした。お母さんから「せんちゃんの日本語の発音もきれいだし、せんちゃんなら大丈夫だよ。」と励まされて、頑張りました。本番は緊張したけど、うまく発表でき、友達もたくさん褒めてくれました。また、日本の高校の部活と日本文化を体験したいので、太鼓部に入りました。太鼓部は学校内の行事はもちろん、色々な祭りにも参加し、発表できます。祭りに出るために一生懸命練習したけど、基礎が弱いので、同じスピードで叩くのが難しかったです、この時、お母さんとお兄ちゃんは太鼓のビデオを探してくれて、「楽みながら叩けばいいよ。まだ練習の時間があるじゃん。」と言ってくれました。

このように励ましてくれたり、褒めてくれたりしたおかげで、ずっと自信のない私はだんだん自信がついてきました。ホストファミリーだけではなく、神村学園での学校生活も私の性格を変えてくれました。

「やればできる
　　必ずできる
　　絶対にできる」

この神村学園の「ヤカゼ」というモットーは一生忘れないでしょう。

クラスメイトと一緒に体育祭で力を尽くしてクラスのために一生懸命応援したこと、太鼓部の友達と一緒に新しい曲を覚えるために遅くまで練習したこと、書道の友達と一緒に3年生の送る会で心を込めてかっこいい漢字を書いたことなど、神村の多くの行事にクラスメイトや友達と参加していくうちに難しいことにも挑戦しようとする性格になりました。一年間英語国際コースに在籍し、明るいクラスメイトのおかげで、私は前よりすごく明るくなりました。ホーム合宿の時、一緒にカレーを作ったり、笑ってしゃべったりして、サンドクラフトの日には、一緒に砂で顔なしのキャラクターを作ったりしました。みんな私のために素敵な誕生日パーティーを開いてくれて、泣き出した瞬間など、全ての思い出は私の宝物になりました。この11ヶ月間、私の17年間の人生をきれいに彩ってくれました。鹿児島に来ることができて、神村学園で学校生活ができて、沼田家と家族になって、本当によかったと思います。これからも変えてくれた自分を大事にして、「ヤカゼ」を忘れないように頑張ります。

とうとう終わったね。またね、大好きな鹿児島…。

宝島から世界へ

沖縄県立向陽高等学校／杭州外国語学校
薛　越
XUE Yue

この留学プログラムのことを初めて聞いた時、目的も困難も何一つ考えず、絶対に参加したいと思いました。一年後の私がきっと、思いもよらない収穫をたくさん持ち帰ってくると信じていたからです。このような素朴で単純な信念が、やはり間違っていないと、今なら自信を持って言い切れます。

「沖縄」、この言葉の意味を今一度考えてみると、語りきれないほど多くの思いで心いっぱいになります。美しい島国に人々の暖かい心、万国津梁という誇りと語りきれない痛み、今も抱えている煩いと平和を守る決意、そして限りなく強く、躍動している新たな可能性が、今私の知る沖縄となっています。異郷人ではありながらも、この土地に心を惹かれ、その運命を祈り、その未来を見守りたいという気持ちが生じたのは、実に不思議で貴重な体験でした。

一年間、私はこの南の島で、人生の宝を見つけました。かつてない自由の中で自主性を高め、自分の中にある様々な可能性を発見する楽しい一年間でした。着物を作ったり歴史や文化を学んだり、そして平和集会や講演会に参加して、自ら人に話しかけ、論議を上げることもたくさんありました。自分の意志で機会を掴んで、いろんなものに挑戦する勇気と根性なら、今の私にはあると思います。

この一年間は、考えることの好きな私にとって、実に多彩な一年間でした。馴染んだ環境から離れ、今まで当たり前なこととして受け止めてきたものがそうでなくなります。それが、必ずしも愉快なことではありませんが、このような体験こそが、かけがえのない意味を持っています。新しい情報と異なる視点を取り入れながら、自分自身が信じてきたものをもう一度問い直し、誤りを排除して信じるべきものをより根強く信じることができます。そして、お互いの違いから目を逸らさずに、それでも傷つけ合うことなく触れ合う可能性を求めて、私達は異文化交流の真義に近づいていきます。

この一年間、私はこの留学プログラムあっての素晴らしい出会いに感嘆しつつ、大事に過ごしてきました。日中交流センターの先生達や、回りにいる数多くの人達の、「人々の心を繋いでいきたい」という熱い夢は、私の夢にもなっています。たとえ力不足としても、何か貢献しようとする気持ちが、沖縄向陽と中国の杭州外国語学校との間の文通プロジェクトや、母国について紹介するプレゼンテーションなどの発端になって、そしてこれからもずっと、私の努力を促していきます。

目を開き、私が見た自分とこの世界は、今まで知っていた小さな枠を遥か超え、そしてこれからもどんどん広くなっていくことに、無上の喜びを感じます。

17歳の夏、あの出発日の朝、心を弾ませた期待と緊張感を再び思い出しながら、この思い出の島からもう一度旅立ちます。今回は図南雄飛という志を持って、あの無限に広がる未来へ。

楽しい時期も辛い時期も、一番近くで励まし、そして助けてくれたのは
受入校の先生方、友達、ホストファミリーの方々でした。
1年間お世話になったみなさまから、第13期生受入れのご感想をお寄せいただきました。

受入校

第13期生薛越さんを受入れて

沖縄県立向陽高等学校　教諭　城間 真理子 先生

本校は心連心第1期生で2名を受入れて以降、ほぼ毎年（第3期生以外）中国人留学生を受入れている。本校赴任2回目ということもあり、第4期生から第9期生と、第12期生から現在受入れている14期生を含めると、9人の留学生に関わっていることになる。どの期の留学生も直ぐに顔が思い出せるほどそれぞれが個性的で思い出深い。

これまで受入れた中国人留学生はみな優秀な生徒ばかりであったが、昨年度受入れた第13期生の薛越さんは歓迎レセプションで挨拶を交わした時から、目を輝かせいろいろ質問をしてきたり、少しも聞き漏らすまいとメモを取る姿に、これまでの生徒とは何か違うぞと感じさせられた。

沖縄に向かう羽田空港での事、書店に行きたいという彼女は、日本人でも読むのに時間がかかりそうな分厚い本を2冊も購入し、搭乗を待つ間や機内でその本を辞書片手に読んでいる姿に驚かされた。沖縄に到着し寮に送り届けると大勢の寮生に出迎えられちょっとはにかんだ表情の彼女がいた。その日から彼女は「えっちゃん」と寮や学校で呼ばれる様になった。

受入れて間もなくして、彼女の流暢な日本語を聞き、また化学や倫理等のテストで学年トップになったり、全国必修模試を受験すれば、全国でも上位に入る成績を納める等、「えっちゃん」は学校でも一目置かれる存在となった。英語も得意な彼女は、本校生徒対象に募集したECCの英語スピーチ大会の予選を通過し、大阪で行われた全国大会にも出場し、優秀な成績を納めた。

受入れ期間の約11ヶ月を1日も無駄にしたくないという彼女の気持ちが伝わってくるほど、彼女はいろいろなことに挑戦し続けた。平和学習にも興味を示し、県内外の高校生と宿泊学習を通して意見を交換しあった。これまで受入れた留学生の中で、放課後講座を受講したいと申し出てきたのは彼女が初めてで、「沖縄の歴史」や「美術」の放課後講座を受講し、講座終了後担当の先生を捕まえて質問している姿がよく見かけられた。

選択で2年中国語コースの授業に参加し、クラスの生徒の授業のサポートをしてくれていたが、生徒が台湾の生徒と文通をしていると知ると、うちの学校ともぜひやって欲しいと申し出てきて、メールで数回やり取りをしたが、そのメールの取りまとめ役として奮闘してくれた。

7月に行われた向陽祭では、クラスの劇で主役を見事務め上げ、最優秀賞を獲得したが、練習期間中なかなか関わることが少なかった級友とも関わりを深め、「向陽高校で過ごすことができて本当に幸せだった」と空港に送る車の中で語ってくれた彼女のとびっきりの笑顔が今でも忘れられない。彼女はまたこうも言ってくれた。「来年の夏休みに向陽高校に遊びに来ます!」と。沖縄が彼女の第2のふるさととなってくれたんだと喜びを感じる。

今でも時たま、現3年生の国際文科の生徒から「えっちゃん元気かな?」と話しているのが聞こえてくる。

受入校

黄 飛逸さんを受け入れて

大阪府立桜塚高等学校　指導教諭　田上 浩 先生

私が黄飛逸さんと初めて出会ったのは、２０１８年9月8日の土曜日、東京・品川のホテルで開かれた「心連心　第１３期生対面式」の席でした。礼儀正しく、控えめな生徒さんというのが第一印象でした。その印象は、対面式が終わって羽田空港に移動した後も変わることはありませんでした。故郷を離れて、異国の地で1年近い留学生活を始める希望と不安が、彼女の言葉の端々から感じられました。

大阪までの飛行機の中で交わした会話が今も心に残っています。黄さんの住んでいる洛陽は後漢の都として日本でもよく知られていること、私が２０代のころに北京や上海を訪れたことなどを、私は筆談も交えて一生懸命伝えました。黄さんも小さい頃から日本のアニメを見て育ったこと、中国語で太宰治の「人間失格」を読んだこと、さらにテストはいつから始まりどれくらいの時間で問題を解かなければならないのかといった質問を日本語でがんばって話してくれました。会話の中でも、私の黄さんに対する第一印象は全く変わりませんでした。終始、謙虚で遠慮がちな態度ながら、熱心に語りかけるときの彼女の視線には、熱い意志のようなものが感じられました。

週明けの登校日から、黄さんの桜塚高校2年生での生活が始まりました。本校で中国人留学生を受け入れたのは、これが2人目でした。以前の経験で、中国の生徒さんは好き嫌いをはっきりと主張するという印象を持っていたのですが、黄さんは全く反対で、「もう少し自分の主張をしてもいいんだよ」とついつい言いたくなる事もしばしばでした。日本人にも中国人にもいろいろなタイプの人がいるのが当たり前なのに、ついついステレオタイプに縛られている私自身の意識を再認識しました。

すぐにクラスに仲のいい友達が出来ました。友達の一人の誕生日のお祝いで、みんなで梅田に行って食事をするんだと報告してくれたのは、登校が始まって２週間後くらいだったと思います。彼女のうれしそうな表情に、思わず私も安堵したことをおぼえています。最初のホストファミリーのお宅から、２軒目のお宅に引越しをする時のことも印象的でした。荷物を車に全て積み込み終えて、「お世話になったお母さんに最後にちゃんとお礼しようね」と言ったのですが、黄さんはあふれる涙をこらえきれず、何もしゃべれませんでした。車の中でもずっと泣きつづける黄さんの表情に、学校での彼女とは違う別の一面を見ました。

３学期、本校では英語スピーチコンテストを実施しています。この時、留学生は日本語でスピーチするのが恒例となっています。黄さんは、「国を離れる不安やドキドキした気持ちを持って日本に来ました。言葉の壁だけじゃなく、習慣や考え方も違うし、辛さも感じました」と率直に述べながら、「趣味の合う友達もできて、普段も楽しく喋って、日本についてのこともわかってきて、異国での孤独感もだんだんなくなりました」と立派にスピーチしてくれました。

４月、３年生に進級しても、真摯に学校生活をおくる黄さんの姿勢は変わりませんでした。テスト前、誰よりも遅くまで自習室に残って勉強に励む彼女の姿は、他の生徒にも大きな影響を与えたと思います。美術部で活動し、他の部員と一緒に展覧会に出品したり、地域の国際交流協会の会報の表紙イラストを描いたこともありました。中国人留学生がたくさん在籍する大阪大学のキャンパス訪問して将来の夢を語ったり、体育祭でみんなとダンスを踊っていた姿も印象的でした。そんな様々な経験が黄さんのこれからの人生の糧になると、私は強く信じています。そして、異国の地で学ぶ黄さんの姿に、本校の生徒たちがたくさんのことを感じ、学び取ってくれたならば、これ程うれしいことはありません。

最後になりましたが、心連心第１３期生・黄飛逸さんの今後の活躍を祈願致しますと共に、このような機会を与えてくださった国際交流基金日中交流センターの皆様、日本での家族となっていただいたホストファミリーの皆様に心より感謝申し上げます。

ホスト
ファミリー

自然体の毎日

邱一鳴さんホストファミリー　青海 暢子様

昨年の江さんに続き、中国人留学生邱さんが家族の一員となり、３姉妹３JK（女子高生）の賑やかな毎日を過ごした5か月間でした。今まで短期ホームステイの受け入れは経験していましたが、数か月に渡るのは初めてのこと。最初の2週間くらいはお互いどんなものだろうと、遠慮がちなものでした。ですが、日本の生活にすぐに馴染んでいた邱さんと、毎日の出来事を話し、冗談を言い合い、食事時には会話が途切れることはありませんでした。なんと、我が家の子供達の仕事であるお風呂掃除までもきちんとこなしてくれていました。

他人を家に受け入れるのは大変でしょう?と聞かれることがあります。果たしてそうでしょうか?他の国の人と一緒に過ごすと、お互い新たな知識を得ることができます。少し相手の気持ちを考えてみようと省みることができます。他の言語を毎日の中で何気に覚えられるだけでなく、(私は簡単な挨拶さえも覚えられませんが）様々な考え方があることも知ることができます。学ばせていただくことが沢山ありました。必要以上に気を遣うことをせず、今まで通りの普通の生活をしているだけの我が家でした。お互いの気持ちに寄り添いあえば国籍なんて関係ないと感じています。

高校2年生のいちこ（邱さんのあだ名）がノーマルスピードの日本語で会話していることには目を見張るものがありました。勉強のみならずJPOPや日本のドラマにも精通。ドラマを見ることは一番の勉強法だったとか。敬語のみならず、とっさの一言で「やばい!」「それな!」という若者言葉がでてくるのをみると、微笑ましく思うとともに、呑み込みの早さに驚くばかりでした。また、我が家で過ごした数か月間で体重増加したとのこと、すると毎日欠かさず夕食後に筋トレをするようになり、これまた怠らないばかりか、きちんと元通り。毎日コツコツがどれだけ大切かをまた教えられました。

言葉だけでなく初めての日本の生活に戸惑っていたこともあった筈ですが、そんな姿は微塵もありませんでした。それよりも何よりも日本で部活動に打ち込み、JKらしくお揃いの服を着て出かけたり、学校帰りに寄り道しながらテスト勉強、真の友人を作ることのできる彼女の柔軟性・協調性にもびっくりさせられました。

中国に帰国し、今まで以上に勉強にうちこんでいるであろうイチコが、一回りも二回りも成長してまた日本に訪れる日を青海家一同心待ちにしているところです。

ホスト
ファミリー

「再見」　―再会の楽しみ―

林煜菲さんホストファミリー　松尾 亮爾 様

ユウヒさんが帰国してあっという間に2ヶ月が経ちました。我が家には中学3年生の長女、小学6年生の長男、小学2年生の次女の3人の子どもがいますが、１１か月間一緒に暮らした「お姉さん」との別れに、子どもたちは涙が止まらず、受け入れることにしばらく時間がかかったようです。子どもたちにとっても、密度の濃い貴重な経験となりました。私たちが共働きだったこともあり、義理の父母が平日昼間は我が家でユウヒさんの留学生活をいつも見守ってくれました。私の父母も交えて最後に送別会を開きましたが、妻と私の両親にとっても貴重な経験となったようです。ユウヒさんが最後に「１年間私を受け入れてくれて本当にありがとうございました。」と旅立つ玄関先で涙ながらに話をしてくれたことが何より嬉しく、一緒に過ごせて良かったという瞬間でした。

ユウヒさんが我が家に来た当初は、部屋に籠もり中国の御両親と会話をしながら毎晩のように泣いている声が聞こえてきました。子どもたちはユウヒさんのホームステイを心待ちにしていたこともあり、ユウヒさんと会話をしたりゲームをしたり、一緒に出かけたりすることがとても楽しみで、そのような中で、ユウヒさんも次第に元気になっていく様子が分かりました。私たち夫婦も、そのような姿を見守りつつ、ユウヒさんを特別扱いはせずにできるだけ自然体で家族の一員として過ごすことができるよう心がけました。

時には、日本での体験を楽しんでもらおうとお茶会体験のイベントや、知り合いを通じ、長女と一緒に着物着付けのコンテストの体験、門松づくりの体験などの機会もつくりました。また、家族で、鹿児島や天草、阿蘇などに旅行にも行きました。妻は、季節の折にお節料理やひな壇飾り、お花見など日本特有の文化に触れてもらえるようにしていました。そうした体験について、ユウヒさんが心連心の日記に書いた記事を読み、楽しく過ごしていることが実感でき大変嬉しく思いました。一方で、できるだけ高校の友人たちと遊びに行ってもらったり、一人で出かけたりもできるよう、休日もユウヒさん自身の時間をとるように心がけました。

ユウヒさんとの１１か月間を振り返ると、私たち家族がユウヒさんから学んだことも多いことに気づきます。試行錯誤の連続で、高校生として日本に来て真剣に学ぼうとする若者に我々家族がどれだけの支えになれたのかは分かりませんが、その真剣な姿勢に向き合えたことは、家族それぞれの成長にもつながったと思います。日中交流に微力でも関わることができたことは家族の一生の財産となったといえます。

今でもテレビ電話やSNSでの交流が続いています。ユウヒさんとの別れ際、長男は「中国にいつか会いに行きたい」と話をしていました。私は「日本の我が家と思っていつでも帰ってきてね」と声をかけました。中国語でさようならは「再見」ですが、文字通り、いつの日か成長したユウヒさんに会えること、日本の「我が家」に帰ってきてくれることが家族の新たな楽しみとなっています。

友達

ゆえちゃんとの思い出

趙 子玥さん受入校　光が丘女子高等学校　米森 みゆ さん

私が留学生の受け入れをしたのは今回が初めてでした。初めての試みに不安もありましたが、ゆえちゃんは日本語がとても流暢で、すぐに仲良くなることが出来ました。クラスの友達ともすぐに打ち解けることができるゆえちゃんのコミュニケーション能力に驚かされました。

半年間でゆえちゃんとここには書ききれないほど沢山の経験をしました。一緒にスキーやキャンプに行ったり、お餅つきをしたり、ママさんバレーに参加したり、ゆえちゃんのお誕生日会をしたり、パンケーキを食べに名古屋まで行ったり、浴衣を着たり、HSKの試験勉強を教えてもらったり、ゆえちゃんと過ごした思い出は今でも鮮明に思い出されます。素敵な思い出をくれたゆえちゃんに心から感謝しています。

学校では、体育大会や球技大会、文化祭、合唱コンクールにも参加しました。なんでも一生懸命取り組むゆえちゃんは学校行事でもクラスメイトと共に楽しむことが出来ていました。

また、私が悩んでいる時には話を聞いてくれたり、相談に乗ってくれました。毎日一緒にいるからこそお互いを理解出来たのだと思います。そんなゆえちゃんは私にとって家族の1人と言うよりも、かけがえのない親友だったと思います。素敵な出会いに感謝して、これからも連絡を取りあって行きたいと思います。そして、いつかゆえちゃんに会いに天津に遊びに行きたいと思います。

友達

私の友 孫逸馳君

孫 逸馳くん受入校　清風南海高等学校　田中 雅久 さん

孫逸馳君が来たとき、僕はいつの間にか尊敬の念を抱いていました。初めての留学をしている彼にとって日本（外国）は未知の世界にもかかわらず、一人でその世界に飛び込んできておびえたり、閉鎖的になったりすることなく、すべてのものを吸収する如くいろいろなことに興味を示していたからです。僕も一人で留学した経験があり、一人で外国で過ごす恐怖・むずかしさを知っているからこそ、より私は尊敬したのだと思います。

彼の10か月の滞在中も驚きの連続でした。授業や休み時間はおろか友達と遊びに行くときさえも日本語を使っていたのです。第三言語で授業を受けることはとても難しいことだと思います。しかしそれに対しアレルギー反応を起こすことなく乗り越え、最後にはジョークを入れることができるようにもなった彼を見て、いろいろな語学をマスターし、たくさんのコミュニケーションをとりたいと思っている僕の理想の姿を見せつけられているように感じました。また、現代社会の授業は彼にとっては中国と全く異なった概念を学んでいるはずなのに、また中国の情勢について聞かれると日本語にはない中国語を上手に翻訳しながら説明していた時、彼はただ作業のように日本語を勉強しているのではなく、柔軟さも持っているのだと実感しました。

また、スポーツ面ではスポーツ大会（バレーボール）の時クラスのみんなと協力しながら大活躍している姿を見て圧倒されました。在校生にとっても難しいことを彼が普通にしていたからです。僕は彼が才能だけではなく親しみやすさも兼ね備えていたからできたのだと思います。

要約すると、彼も僕もほぼ同じ日数しか生きていないのに、僕は彼から彼のように友達と仲良くしながらいろいろな面で継続的な努力をする必要があると刺激を与えてもらったということです。これからも彼と友達関係を続け、もっとたくさんのことを彼から吸収したいと思っています。

スポーツ大会

お別れ会

受入校の声

他の生徒と比較しても、とてもよく頑張って部活と勉強に取り組んでおり、周囲に良い影響を与えてくれた。

しっかりとした自分の考えや目標を持ち、日々有意義に過ごしている姿を見て、本校の生徒も刺激を受けている。

受入れにより、教員も常に新しい知見と刺激をいただいています。草の根の日中交流として大変有意義です。

報道で接する中国の情報は一側面でしかないことを学び、複眼的なものの見方や考え方ができるようになる契機になっているように感じる。

本校が多様な価値観を大切にして、異文化に尊敬の念をもって接することのできる生徒の育成を目指しているため、それに資するところ大。

級友は中国に対して新しい知識を得たり、偏見の解消もあったようです。それをもう少し学年全体、学校全体に広げられなかったのがこちらの課題です。

ホストファミリーの声

中国という国をとても身近に感じ、現在の中国を（そして世界や世界の中のアジアを）知りたいと感じるようになりました。留学生の方の生活態度や学習習慣も素晴らしく、家族全員でお手本としています。

政治上ではいろいろあっても、人としてわかりあえ、交流できるということを感じられる。

昨今は特に「中国人は…」といったステレオタイプで表現されがちですが、一人一人ちがう、でも同じ人間であると当たり前のことに改めて気づかされました。

できれば、４０、５０代の若い、高校生を持つ世代がなさるのが一番良いと思います。若い世代のさらなる関心があるといいですね。

決して順風満帆ではなく、小さなことでもお互いに気を遣ったり大変なこともありましたが、家族一人一人が留学生と向き合い、お互い折り合いをつけていくことで成長できたと思います。

自身が無知であるからこその中国に対する少なからずある偏見を払拭させてもらえた。

あとがき

2019年7月、第13期生26名全員が無事に中国に帰国しました。現在は中国の在籍校に戻り、元気に高校生活を送っていることと思います。

2018年9月に来日した第13期生は男子11名女子15名と、例年よりやや男子の割合が多かったためか、研修で集まるととにかく元気いっぱいという印象が強いです。今期は、毎年2月頃に実施していた中間研修の時期を早め、留学生活の最初の壁にぶつかることが多い3ヶ月目の11月に実施したり、3月の春休みに4地方に分けて1泊2日の地域別研修を行ったりといった新たな試みを行いました。11ヶ月はあっという間のようでいて、彼らが周りの人たちと深い信頼関係を築き、その過程で悩みながら壁を乗り越えていくための、長く密度の濃い時間でもありました。最初は慣れなくて自分からはなかなか声をかけられなかった人も、少しずつ心を開いて友達やホストファミリーとかけがえのない絆を育んでいきました。一人ひとりがそれぞれの場所で一日一日を大事に過ごし、周りの人たちの暖かい想いに支えられて、「心連心」プログラムを最後まで修了してくれたことを、心から嬉しく思います。

留学生活の終わりは、彼らの人生の新たなスタートでもあります。本事業の修了生は約4割が日本の大学へ進学したり、また大学卒業後日本の企業に就職したりして日本に長期滞在しています。中国で進学・就職している卒業生も日本研究の道に進んだり日系企業に就職したりなど、まさに日本と中国の架け橋として活躍しています。第13期生も先輩方に続き、将来さらに立派に成長していってくれることを願ってやみません。

最後に、第13期生の日本滞在をずっと支えてくださった受入高校の先生方、ホストファミリーの皆様、そしてすべての関係者の皆様の日頃からのご尽力、ご支援に、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

国際交流基金　日中交流センター

事務局長　塩澤 雅代

心連心ウェブサイト

日中両言語対応

https: ／／ www.chinacenter.jp ／

日中交流センターでは、日本と中国の将来を担う若者たちが心と心を結び合う“心連心”をテーマに、「高校生長期招へい事業」「中国ふれあいの場事業」「ネットワーク強化事業」を実施しています。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

発行　独立行政法人国際交流基金
日中交流センター

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-16-3
TEL：03-5369-6074　FAX：03-5369-6043

2019年12月発行

Heart to Heart

JAPANFOUNDATION 国際交流基金
日中交流センター